



舞台芸術AIR研究会2020報告書

舞台芸術に  
おける  
アーティスト・  
イン・  
レジデンスの  
現在

# はじめに

舞台芸術AIR研究会では、2020年8月から2021年3月にかけて、舞台芸術におけるアーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を考える研究会と調査を実施しました。

アーティスト・イン・レジデンスは移動と滞在を伴う事業ですが、そのきっかけは、奇しくも、新型コロナウイルス感染症の拡大でした。その移動が困難な状況下で、アーティスト・イン・レジデンスをどのように運営するのか、現状やその対応、悩みや不安、課題を共有した情報交換会に参加したメンバーを中心に研究会を発足しました。

キックオフミーティングでは、アーティスト・イン・レジデンスの運営に関する共通の課題や問題意識が浮き彫りになり、また、舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を議論するためには個々の事業や活動の理念や目的を振り返る必要があるという意見がありました。そこで、「ピアレビューをするのはどうか」というメンバーの提案のもと、アーティスト・イン・レジデンスの運営者が運営者の事業や活動をインタビューする調査を行いました。本報告書は、その一連の活動をまとめたものです。

今振り返ると、10年前には舞台芸術において、「アーティスト・イン・レジデンス」という言葉はそれほど馴染みがありませんでした。しかし、昨今では、創作において、レジデンスというプロセスを踏むアーティストが増え、さらに、アーティストやプロデューサーが手掛けるユニークなレジデンスも始まりました。

現在、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、オンラインやリモートでのアーティスト・イン・レジデンスの試みも始まり、これまでのアーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を再考する議論も行われています。アーティスト・イン・レジデンスの意義や役割は時代とともに変化する、その可能性は今後も広がり続けるでしょう。

本報告書はその変化の途上にあります。そのため、舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンスを一括りに定義するのではなく、具体的な事例の多様性に主眼を置いて整理しました。これからアーティスト・イン・レジデンスを始めたいと考えている方々や、行政関係者や研究者の方々にも参考となる多様な取り組みを事例として整理しました。ぜひ、ご活用ください。

末尾になりましたが、インタビューやそのレポートのとりまとめ、シンポジウムの開催にご協力下さった方々、研究会にご参加下さった方々、また、シンポジウムにご登壇下さったアーティストの方々へ深く感謝いたします。

# 目次

第1章	アーティスト・イン・レジデンスの実践	P.03
01	公益財団法人セゾン文化財団／森下スタジオ 【東京都】	P.04
02	一般社団法人横浜若葉町計画／若葉町ウォーフ 【神奈川県】	P.07
03	一般社団法人シアター&アーツうえだ／犀の角 【長野県】	P.09
04	公益財団法人静岡県舞台芸術センター／静岡芸術劇場・静岡県舞台芸術公園 【静岡県】	P.11
05	ダンスハウス黄金4422 【愛知県】	P.14
06	公益財団法人豊橋文化振興財団／穂の国とよはし芸術劇場PLAT 【愛知県】	P.17
07	公益財団法人京都市芸術文化協会／京都芸術センター 【京都府】	P.19
08	豊岡市／城崎国際アートセンター 【兵庫県】	P.23
09	特定非営利活動法人ダンスボックス／ArtTheater dB 神戸 【兵庫県】	P.27
10	公益財団法人高知県文化財団／高知県立美術館 【高知県】	P.30
第2章	舞台芸術AiRミーティング2021	P.33
第3章	舞台芸術におけるアーティスト・イン・レジデンスの特徴と役割	P.40

第1章

アーテイスト・イン・レジデンスの実践



## AIR事業・運営団体データ

開始年	2011年
事業名	セゾン・アーティスト・イン・レジデンス
対象分野	演劇、舞踊、パフォーマンス
募集方法	公募、指名等
年間滞在人数／組	7人(2019年実績)
年間派遣人数／組	2人(2019年実績)
所在地	東京都江東区森下3-5-6
URL	<a href="http://www.saison.or.jp/r_morishita/index.html">http://www.saison.or.jp/r_morishita/index.html</a>

## 1. 設立趣旨

セゾン文化財団は堤清二氏の私財によって1987年に設立された助成型財団である。日本の現代演劇・舞踊の振興と国際交流の促進に寄与するため助成活動を行っている。セゾン・フェローやサバティカルなどのアーティストの創造活動の支援、また、創造環境や国際交流を促す事業の支援を行う助成事業に加え、自主製作事業として、アーティスト・イン・レジデンスプログラムを実施している。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

現在のレジデンスプログラムが事業化したのは2011年であるが、それまでに財団が運営する森下スタジオで行われた国際交流事業がその背景としてある。

財団設立当時、支援アーティストに、より良い作品が継続して生まれるためにどのような支援が必要かとアンケートをしたところ「資金、時間、稽古場が欲しい」という意見があり、資金のみではない支援として森下スタジオを1994年に開館した。設立当時はレジデンスという言葉もなく、招聘や海外公演をするだけで「国際交流」と言われていた時代であったが、本当にそれで深い国際交流ができていいのか?という疑問があった。協働して制作することや互いの思考を交わす時間が必要ではないかと考えていたところ、1994年にアメリカとアジア間の芸術家交流を支援するAsian Cultural Council等と共同で、アメリカ・インドネシア・日本の3カ国による「トライアングル・アーツ・プログラム・イン・ダンス」を実施したのが、最初のレジデンスと位置づけられる事業であった。それぞれの国から、ダンサー、制作者、批評家が参加し、各国を訪問、滞在し、現地のダンスコミュニティとの交流により、ワークショップやトークを開催して1ヶ月以上をともに過ごした。本事業は、97年、99年、2002年と事業を継続された。日本からは、後にJCDNを立ち上げる佐東範一氏や、ダンサー・振付家の山崎広太氏等も参加。京都のモノクロームサーカスの坂本公成氏やDANCE BOXの大谷燠氏とも交流している。こうした事業が新たな人のつながりや活動を生むことがわか

り、レジデンスに関心を持ったが、当時は「レジデンス」という言葉がなかったため、説明するのが困難であったという。

財団の歴史で「レジデンス」という言葉が現れたのが2001年で、シンガポールの演出家オン・ケンセンが森下スタジオで1ヶ月、新作創作のために滞在したときであった。そのときに「自分は、森下スタジオ初のレジデント・アーティストですね」という発言があり、これをきっかけにレジデンスという言葉が定着したという。この頃から国際協働事業に対する助成プログラムの申請件数が増え、リサーチしながら創作する方法も定着してきた。当時は森下スタジオにゲストルームがなかったので近所のウィークリーマンションに宿泊し、滞在創作するアーティストも増えて、自然と森下スタジオがレジデンスの場所となった。

レジデンスプログラムは自主製作事業なので資金獲得のため数多くの申請書を書いたという。「レジデンス」という言葉がなかった当時は「多文化共生」「異文化と出会う」「体験すること」「新しい作品のインキュベーションとなる」などという言葉が申請書につかった。また「滞在型クリエイション」というような表現でレジデンスのような事業を実施し、2011年に事業化。

## (2) 事業の目的や理念

財団の支援活動である「国際交流」のミッション達成のために効果的な手法の一つと考えている。また舞台芸術のレジデンスが活性化するような環境を創出することを目的としている。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

「セゾンAIRパートナーシップ」と「ヴィジティング・フェロー」の2種類のプログラムがある。支援対象は主に現代演劇やコンテンポラリーダンス、パフォーマンス分野で活動するアーティスト、アーツ・マネージャー。主に公募でアーティスト等を選考しており、公募こそ未知のアーティストに出会うチャンスと考えている。公募では、アーティストに誘いをかけることもあるが、アーティスト本人の意思や思いも





森下スタジオ外観



森下スタジオCスタジオ

図れるので申請書を書いてもらっている。

「セゾンAIRパートナーシップ」ではパートナーが指名したアーティストを招聘することが多く、国内アーティストを指名する場合もあるが基本的には公募で広く募集したいと考えている。公募の件数は近年横ばいで、突出して増減しているわけではない。カンパニーではなく1~2人程度のアーティスト等を招聘する都合上、演劇よりもモビリティが高いダンスの方が応募件数も多い。

海外アーティストの選考では、日本でリサーチや滞在制作する必然性があるか、テーマやトピックが明快で、影響力があるか、自分と異なる他者の思考や感性を受け入れられるかを重要視する。森下スタジオでワーク・イン・プログレス等発表する場合もある。具体的な発表の計画があるアーティストはその後に国際プロジェクト支援の助成プログラムへの申請も可能なため、このプログラムでは舞台制作に入る前のリサーチの支援にフォーカスしている。一方で、リサーチだけではなく上演に繋がることが重要なため、レジデンスで得られたものが作品となり、公演などで発表されるまでの計画も選考の対象としている。国籍や年齢制限は特にない。

#### ① セゾンAIRパートナーシップ

2018年より実施。海外の芸術団体との双方向の国際文化交流を促すレジデンス・プログラムで、海外・国内のアーティストが参加している。このAIRパートナーシップでは、海外の芸術団体が財団とのパートナーシップを申請することもできる。滞在期間は、日本と海外でそれぞれ15~30日程度。国によって予算状況も異なるため、諸条件を合意させるのが難しいことも多く、相手国のパートナーとの親密な関係がないと対等に実施できないという。一方で、国内のアーティストが海外に活躍の場を広げる機会となり、レジデンスの範囲が国内だけでなく海外に広がる方が良いと感じているため力を入れていきたいと考えている。

2020年度は5カ国参加のデジタル・レジデンスを実施しているが、コロナ禍で初めて実施するのですべてが手探りでより難しいと感じている。各提携機関とアーティストがホストし、レクチャーやワークショップをオンライン空間で共有し12月に成果発表を実施。日本からは敷地理氏が参加している。

#### ② ヴィジティング・フェロー

前述の通り1994年以降、類似事業を実施していたが、2011年より事業化。対象者は海外のアーティストやアーツ・マネージャーで、45歳以下は国際航空運賃、日当や活動費の支給がある。滞在期間は20~50日間で、日本でのリサーチや出会いの機会などを支援・提供している。東京だけでなく、全国をリサーチの対象地域と考えているため、滞在アーティストは各地を旅したり、会いたい人にアポを取り、対話の機会を得ることができる。東京を主な活動地とするアーティストが多いが、島原へ行ったアーティストには現地を案内するドラマトルク役のアーティストもサポート。また、Art Theater dB 神戸を訪問し、横堀氏からリサーチのアドバイスをもらうこともある。そのような出会いや交流を通じて、新しい関係性ができるのもいい成果だという。

#### (2) 滞在アーティストの活動や支援

滞在アーティストには国際航空運賃、日当、活動費を支給している。また滞在アーティストの興味や関心に合わせてリサーチやクリエーションの一部を支援する。

例えば、ダンス分野のアーティストが4週間滞する場合、最初の3週間をリサーチ、残りの1週間をスタジオで創作とするケースが多い。森下スタジオの稽古場を利用するよりも、外に出かけて話を聞いたり、何かを体験しに出かける人が少なくない。能のリサーチをしたフランスの演出家、マキシム・キュルヴェルスを支援した際には、立教大学の横山太郎先生にご協力をいただいた。能の歴史や表現についてレクチャーやリサーチのアドバイス、能楽師の紹介をしていただき、アーティストは能の稽古を見学することもできた。

#### (3) 滞在アーティストの成果や効果

アーティストの滞在成果はその滞後に完成する新作であると考えている。リサーチのための滞在のため、その後も2~3年間、継続して付き合うことが少なくない。滞在中に面会やトークイベント等で出会ったプロデューサーが別の企画で滞在アーティストを招聘することもある。アーティストを探しているという話があれば、こちらから紹介することもある。リサーチ先のアーティストやプロデューサーと仲良くなり、その後もよく日本に来る関係性が続いているという。



Museum of Human E-Motions 公開プログラム イタリア文化会館 ©matron2019



RODEO Bloom Up 交換プログラム THE AGENCY ワークインプログレス Photo: Franz Kimmel

### 3. 運営体制

#### (1) 事業のスタッフ構成

プログラムディレクターの下、プログラム・オフィサー、アシスタント・コーディネーターの計3名体制で事業を実施しているが、フェローの滞在期間が重なると相当大変だという。リサーチには同行することも多く、リサーチ内容によって通訳や技術サポートを手配したり、スタッフが通訳をすることもある。アーティストからリサーチの進行や「次にどういった人に会えばよいか?」と相談を受けることも多いので、アドバイスをしたり話を聞くこともよくある。

#### (2) 施設構成

森下スタジオ(合計4部屋)をアーティストの希望に合わせて提供。滞在施設はゲストルームが3部屋。2010年に森下スタジオの新館が竣工され、新しい稽古場とともに、ゲストルームやキッチン付きのラウンジ、会議室が加わった。

### 4. 現状の課題・今後の展望

#### (1) 現状の課題

運営上、大きな問題点や課題はないが、海外アーティストやプロデューサーが現代の日本の舞台芸術のシーンを理解するための文献や資料が少ないことを課題として挙げている。また、文化庁によるアーティスト・イン・レジデンス活動支援について、例えば、交換プログラムでは日本と海外の団体で資金を同等に負担しなければいけないことについても課題だと語った。その理由は、経済的に余裕のない国や地域の団体との交流が実現できないからである。

#### (2) 今後の展望

今後の展望は、事業化して10年経過するので、レジデンスプログラムと財団の助成事業が繋がっていくような流れを今後5年で作っていきたいと考えており、文化庁と財団の舞台芸術振興の目的がうまく相まっていくようにしたいという。また、アーティスト・イン・レジデンスは美術主体で語られがちなので、舞台芸術におけるレジデンスの成果をより可視化させることや、レジデンスの運営は人材育成としてとてもよく、ドラマツルク、通訳、コミュニケーション力を修行できる場であるので若い世代が参入できる普及活動を進めてい

きたいと考えている。

ヴィジティング・フェローではセゾン文化財団単独ではなく地域や他団体と連携して事業を実施し、国際交流を生み出せるようにシフトする考え。また、近年国内でのレジデンス施設が増えて常態化してきたことによって、ダンサーが滞在制作しようと思う機運が高まってきているため、その次のステップとして海外で滞在制作したいと思うアーティストと海外のレジデンスとの窓口でセゾン文化財団がなれるように力を入れたいと考えている。

インタビュー日時：2020年11月11日(水) 14:00 ~ 16:00

インタビュー対象：久野敦子(公益財団法人セゾン文化財団プログラム・ディレクター)  
稲村太郎(プログラム・オフィサー)

レポート作成・聞き手：上栗陽子(公益財団法人豊橋文化振興財団 事業制作部  
事業制作リーダー)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2017年
事業名	波止場のワークショップ
対象分野	演劇、舞踊
募集方法	公募
年間滞在人数／組	15人(2019年実績)
所在地	神奈川県横浜市若葉町3-47-1
URL	<a href="https://wharf.site/">https://wharf.site/</a>

## 1. 設立趣旨

2017年6月設立。1960年代から日本演劇界を牽引する劇作家・演出家の佐藤信氏が発起人。佐藤氏は1980年代からPETA(フィリピン教育演劇協会)を始めとするアジア各国で舞台芸術のコラボレーションを行ってきたが、そこで培った国際的なアーティストのネットワークが個人のレベルを超えて広がっていかないことに将来的な課題感を持っていた。そのため次の世代に対して、アジア圏のアーティストのネットワークを渡して発展させていくための拠点を構想しており、その構想が結実する形で、自由に創作のために時間を使うことのできるレジデンス・スタジオ稽古が可能な劇場施設として若葉町ウォーフを設立した。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

アジア圏のアーティストたちのネットワークを次世代に繋ぐため、レジデンスプログラムとして「波止場のワークショップ」(約20日間の育成目的の滞在型ワークショップ)を毎年開催。

以下の二点を長期的な目標としている。第一に、佐藤氏をはじめとする演劇・ダンス界で長年のキャリアがある若葉町ウォーフ理事の面々がワークショップ等により培ってきたアジア圏の若手アーティストの人脈、また佐藤氏が芸術監督を務める公共劇場「座・高円寺」で行われたプロジェクト「1 table 2 chairs」の参加者などのネットワークをつなげて、同じ場に集うことで共にクリエーションのできるコミュニティとすること。第二に、その中から、ゆくゆくはアジア各国でツアーを回すような舞台芸術作品を作ること。このプログラムの存在はロコミで各国のアーティストに知られてきており、活動地域のバランスを考慮してメンバーを集めている。

## (2) 事業の目的や理念

若葉町ウォーフではコンセプトとして「share: 分かち合うということ(所有しない文化)、networking: 個人的な繋がりを丁寧に結び合わせ広げていくということ、transboundary: 境界(国、世代、ジャンル、伝統と現代)を越えるということ」を掲げており、「波止場のワークショップ」はこのコンセプトを体現するものとして運営されている。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

「波止場のワークショップ」は、佐藤信氏の演劇ワークショップ、内野儀氏の演劇学レクチャー、竹屋啓子氏のダンスレッスン、ゲスト講師のワークショップを通して、最終的に即興での舞台芸術作品のクリエーションを行い、劇場での上演発表を行う約20日間の滞在型ワークショッププログラム。神奈川県が実施する「アーティスト・イン・レジデンス推進事業」の助成を受けており、若手の研修として位置づけている。

2018年8-9月に第1回(中国6都市/北京、上海、武漢、重慶、青島、広州、シンガポール、ジャカルタ、東京、埼玉から、19人のダンサー、俳優、演出家)、2019年7-8月に第2回(中国8都市/南京、常州、北京、合肥、麗江、上海、重慶、シンガポール、ジャカルタ、ホーチミン、東京から、17人の舞台芸術家)が行われた。2020年に第3回目の開催を計画していたが、新型コロナウイルスの影響により中止した。

研修プログラム参加費として、35,000円が必要。参加費には宿代、ワークショップ代も含まれる。

選考は経歴、活動する地域などを総合的に加味し、事業実施者(芸術監督、事業担当者、スタッフ)による合議で決定する。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

非言語でのコミュニケーションが重視されるワークショップを通じて、ファシリテーターのもと参加メンバー同士でもコミュニケーションを取り、最終的に劇場で対外的に発表する即興の舞台芸術作品のクリエーションに向けた準備をする。

中国語、日本語、英語の通訳が同席しているが、基本的には通訳なしでも成立するように進行される。プログラムの公用語は日本語であるが、ワークショップの最中にもっとも多く使われる言語は中国語。誰もがいつでも母国語で喋っている場とされている。多くの育成型プログラムやフェスティバルでは、英語でのやり取りができることが前提となっており、英語で語られるテーマでないと扱づらいという問題点があるが、それを前提としないコミュニケーションができるこ



とが特徴。

クリエイションにおいては、制作物への多少の予算と、人的サポート(最終作品発表に向けた演出アイデアの相談と、テクニカルスタッフの提供)がある。

### (3) 滞在アーティストの成果や効果

ワークショップ終了後、参加者には、滞在制作を経て考えたことや学んだことのレポート執筆を求める。特に提出締め切りは設けず、自主的にあがってくるものを受け取る。レポートは送られてきた言語のままウェブサイト上で公開している。

運営側としては、プログラム後にも参加者間のコミュニケーションが継続しているかどうか、そこで築き上げたコミュニティがネットワークとして機能しているかをできる限り追っている。この点に関する興味深い例として、中国の事例が挙げられる。中国の国土は広大であるため、沿岸部と内陸部のアーティスト同士が会おう場が国内に限られている。また、既存の劇場に所属しない、独立系と呼ばれる演劇人の数も増加している「波止場のワークショップ」は、そうした中国を拠点にするアーティストたちが日本で会おう場となっている。本プログラムの中国からの参加者には、大学教員を務める若手アーティストが少なくないため、プログラムで知り合ったアーティスト同士がお互いの授業の枠を使って呼びあう事例も発生している。

## 3. 運営体制

### (1) 事業のスタッフ構成

理事6名(佐藤信/劇作家・演出家、竹屋啓子/ダンサー・振付家、天野太郎/キュレーター、龍昇/演出家、岡島哲也/プロデューサー・舞台監督、川口智子/演出家)、監査1名、マネージャー常勤2名(理事兼任の岡島氏、島田健司氏/脚本家)、非常勤2名(経理、アシスタントプロデューサー山田カイル氏/演出家)。

### (2) 施設構成

1F劇場・2Fスタジオ・3Fゲストハウス(レジデンス)の3つの機能をもつ。劇場やスタジオは一般への貸出も行っており、通常の貸し小屋・レンタルスタジオとしても運営している。またゲストハウスも同様に一般の宿泊客も、一泊から宿泊を受け入れている。施設ビルは賃貸。前テナントがアートスペースだったこともあり、建物内での活動の自由度は非常に高い。

上述してきたレジデンスプログラムとは異なるが、劇場の一般利用団体が3階のゲストハウスに宿泊して2階のスタジオで稽古、1階の劇場で上演するといった使い方も可能。アーティスト・イン・レジデンスのようにいつからいつまでという滞在期間が厳密に決まっていけないので、稽古場としてスタジオを利用していただいていた団体がそのまま夜にゲストハウスに宿泊することになったり、発展して劇場も借りて試演会を行ったりするフレキシブルな展開もありえる。

## 4. 現状の課題・今後の展望

### (1) 現状の課題

現状の課題は、新型コロナウイルスの状況によって、国を超えた移動が困難となり、設立当初の大目的であるアジア圏でのネットワークにブレーキがかかっていること。この状況において可能な上演のためのネットワークを形成する方法を考える必要がある。

また作品の質という点において、波止場のワークショップで前述した通り、非言語コミュニケーションを重視しており、作品を言説や言葉を紹介せずに作れるような状態にしていることから、作品の言語を介したコンセプト的な部分に弱みを持っている。アーティストとしてのレベルはあまり考慮せずこれまでネットワークを作ってきたこともあり、今後このネットワークでコラボレーションして作品を創作していく上では、言語をいかに扱うかが課題としてある。さらに、アジア圏で舞台芸術を行っていくにあたって、マーケットをどのように捉えるかも考えなくてはならない。国際協働の上でADAM (Asia Discovers Asia Meeting for Contemporary Performance) やBIPAM (Bangkok International Performing Arts Meeting) などのプラットフォームに対して民間団体としてどう動くのかを含め、アジア圏のネットワークを築いていく目的をもった劇場・レジデンス施設としては考えを深める必要がある。

### (2) 今後の展望

今後の展望として、若葉町ウオーフを上演芸術だけでなく場にすることを志向している。例えば、美術の展示をしたうえで1階劇場スペースを開け放しにしたり、日替わりでの音楽祭を計画したりすることで、特定のアートに関心がなくとも入れる場を作り出すことを目指している。

関連して、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言解除後、近隣のアート関連施設の運営メンバーと情報や作戦を共有しあう井戸端会議を週に1度継続的に行っている。映画館のシネマ・ジャック&ベティ、横浜シネマリン、複合施設のTinys Yokohama Hinodecho、横浜市民ギャラリー、黄金町AIRプログラムなどから毎回7~8人が参加している。

ネットワークを形成するために行ってきたレジデンスプログラム「波止場のワークショップ」は、次の第3回までで開催することによって、総勢50名程度のネットワークが作れるので、第4回から新たな展開を考えている。当面の目標は、アジアで恒常的にツアーできる作品を作ることである。

インタビュー日時：2020年11月6日(金) 14:00 ~ 16:00

インタビュー対象：山田カイル(若葉町ウオーフ アシスタントプロデューサー)

レポート作成・聞き手：酒井一途(豊岡演劇祭フリンジコーディネーター)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2017年
事業名	上田街中演劇祭 アーティスト・イン・レジデンスin海野町
対象分野	演劇・ダンス・その他
募集方法	非公募(指名)
年間滞在人数/組	5組(2019年実績)
所在地	長野県上田市中心2丁目11-20
URL	<a href="http://uedafes.sainotsuno.org/">http://uedafes.sainotsuno.org/</a>

## 1. 設立趣旨

上田市(人口約15万人)の中心地・海野町商店街の一角、元銀行の建物をベースとして劇場設備とカフェをそなえた〈シアター〉と、簡易宿泊施設の〈ゲストハウス〉からなる民間の文化施設。「観る」「創る」「出会う／交流する」「裾野を広げる」ための場として、「上田街中演劇祭」をはじめとして2016年より劇場運営を行っている。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

上田街中演劇祭を開催するにあたり、劇場に併設された宿泊施設等を利用して、地域とアーティストとの交流をコンセプトとする滞在創作プログラムを企画した。

## (2) 事業の目的や理念

市民が中心商店街を訪れ、アーティストと交流したり、創作を体験したりすることによる、創造性豊かな人材の育成、世代間及び地域間の交流の促進、上田市の中心市街地の活性化を目的とする。若い世代の東京への流出、人口の少なさ、多様性の小ささといった地域の背景がある中で、地域にアーティストを招聘し、滞在してもらうことで、人が集まる場・多様性を生む場の創出を目指している。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

演劇やダンス、その他ジャンルを問わずアーティストを招聘(非公募)する。招聘団体／アーティストは演劇祭ディレクターが選定。活動をする中での出会いやつながりをもとに、「地域の中にいたら面白い」という視点から招聘アーティストを決定していく。

## ① 演劇・ダンス作品等の創作

演劇祭での公演を前提とした滞在創作を行う。滞在期間は平均して2週間程度。制作過程では、地域や地域の人々との交流を重視している。また、上演会場は「犀の角」の施設のみでなく、空き家・空き店舗など、劇場スタッフによる案内や地域との交流を経て決定し、その会場にあわせた作品の創作を行っていくケースもある。2018年

度は、関美能留(三条会)、二口大学、木内琴子(SPAC)、2019年度は、山田せつ子、岸井大輔、西尾佳織、飯田茂実などを招聘した。

## ② 72時間トークイベント

地域の歴史や人々の生活・活動を見つめ、「上田起点で世界を考える」場とすることを狙いとして「レジデンストーク」を実施。研究者を迎え、演劇、ダンス等のジャンルを超えたアーティストとともにひとつのテーマについてディスカッションを行う。

上田の市民や地域へのリサーチを経て「24時間トーク」を実施した劇作家・岸井大輔と、評論家・熊倉敬聡の出会いから発展した企画。出来るだけ長く一緒に過ごし、「ゆるく」喋っているだけでもながはじまる、新しい考え方が生まれてくるのでは、という思考のもと、演劇祭の核として実施している。〈場所〉という要素が大きく働くレジデンス企画である。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

稽古場、宿泊施設、上演会場、照明・音響・舞台装置等の機材・設備を提供。制作費は、出演料としての支払いのほか、演目ごとの予算に応じて経費を精算する形としている。また、制作のプロセスにおいては、劇場の担当スタッフが公演の担当制作として伴走して上田の街や人々とアーティストとの交流を促し、その地域ならではの創作が行えるようサポートする。

また、上田市の公立文化施設「サントミュージゼ」や上田市文化振興課など、他団体との連携・協働事業も毎年実施しており、その中で歴史的建造物を背景に作品を作る機会もある。

## (3) 滞在アーティストの成果や効果

レジデンストークについては、参加した研究者からも、言語化のための場、思考の場であるというフィードバックがあり、今後も実施を検討している。

作品創作・上演のプロジェクトにおいては、『熱海殺人事件』(演出: 仲田恭子[アートひかり]、2018年上演)で市外・県外からの俳優と地域の俳優が共演。例えば、俳優が台詞を稽古のどの段階ま





犀の角カフェ&バー(イベントや演劇公演時には劇場仕様に転換)



上田街中演劇祭2018 仲田恭子、二口大学、他 『熱海殺人事件～長野県バージョン～』犀の角

でに覚えるか、あるいは、俳優と演出家との関係性がどうあるべきか、など演劇を作る上での思考や文化、身体の異なる俳優との創作過程においては衝突や葛藤がみられることもあったが、この出会いを通して、実施後には互いの演劇文化を認め合うというような、俳優の姿勢に変化がみられ、地域と、地域の外からの俳優同士が交流することで生まれた成果がみえたという。

また、(他の劇場で初演した)作品の再創作の場合には、上田の会場・空間ならではの变化が作品にもたらされることもある。当初は会場が不足する演劇祭に向けて劇場側から外の会場を探していたが、空き店舗・空きスペースの活用を望む家主や、そうした仲介してくれる地域の人などからの提案もあった。アーティストがそうした場所にインスピレーションを受けて作品創作を深めていく一方で、上演によって活用された後の空き店舗にテナントが決定するなど、企画が地域の活性化につながったといえるケースもみられる。

また、劇場に併設されたゲストハウスにアーティストが滞在することで、舞台芸術になじみのない宿泊者がアーティストに出会い、新たな交流が生まれる場ともなっている。

### 3. 運営体制

#### (1) 事業のスタッフ構成

施設のスタッフは計5名。演劇祭のディレクターが常勤としてレジデンスプログラムのディレクターを兼任しており、企画の現場運営は他のスタッフが担うケースもある。プロジェクトを担当するスタッフは、上演会場の選定時や創作の過程で、上田の街を案内し、またアーティストと地域の人々、あるいはアーティスト同士の交流を促していく。そうして地域の気風や風土を含めて「上田ならではの」ものが作品に反映されるように創作に寄り添い、伴走していく。

#### (2) 施設構成

劇場に加えて、稽古場として使えるスタジオや叩き場、宿泊施設など、アーティスト・イン・レジデンス(滞在制作)が可能な施設を備えている。

施設の本館1階は劇場・イベントスペース・カフェバー、2階・3階はレンタルスペースとして、劇団の稽古場/小規模の作業場/アトリエ、各種芸術団体の練習場となっている(各フロア120㎡)。



上田街中演劇祭2019 岸井大輔、西尾佳織、他 『ことなることとことならぬこと』旧竹の湯

宿泊施設としては、劇場に併設されているゲストハウスのほかに法人で管理しているワンルームマンションもあわせて使用しており、後者を利用するケースが多い。

## 4. 現状の課題・今後の展望

### (1) 現状の課題

上演を前提としない滞在創作を考えた場合に、上田でそれを行うことの意義や価値を明確に捉えられておらず、それゆえに(いわば劇場側の都合で)作品の上演を前提とする企画を行っている。そのような現在の形態でよいのかどうか、が現状の課題。アーティストにとってのレジデンスの魅力とは何か、特に次の3点について考えている。作品づくりに求めることとは何か、集中して創作ができる環境があればよいのか、地域に滞在することで新しい環境からの影響を受けたいのか。

### (2) 今後の展望

「今後は公募のプログラムも検討したい。公募の実施のためにはどうすればよいのか、この舞台芸術AIR研究会を通して知識を得たい」と荒井氏は語った。

インタビュー日時：2020年10月16日(金) 11:00～12:30

インタビュー対象：荒井洋文(一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事)

レポート作成・聞き手：中野三希子(SPAC-静岡県舞台芸術センター 制作部)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	1997年
事業名	SPAC秋→春のシーズン
対象分野	演劇、舞踊
募集方法	非公募(指名)
年間滞在人数/組	15人(2019年実績)
所在地	静岡県静岡市駿河区東静岡2-3-1 / 駿河区平沢100-1
URL	<a href="https://spac.or.jp">https://spac.or.jp</a>

## 1. 設立趣旨

公益財団法人静岡県舞台芸術センター(Shizuoka Performing Arts Center : SPAC、以下SPACと表記)は、専用の劇場や稽古場を拠点として、俳優、舞台技術・制作スタッフが活動を行う日本で初めての公立文化事業集団であり、舞台芸術作品の創造・上演とともに、優れた舞台芸術の紹介や舞台芸術家の育成を事業目的としている。1997年から初代芸術総監督鈴木忠志氏のもとで本格的な活動を開始。2007年に宮城聡氏が芸術総監督に就任した。演劇の創造、上演、招聘活動以外にも、教育機関としての公共劇場のあり方を重視し、中高生鑑賞事業公演や人材育成事業、アウトリーチ活動などを続けている。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

SPACは、「創造」を中核に据える文化政策を構想・計画した静岡県と、初代芸術監督鈴木忠志氏のタッグによって、専門家の集団が専用の劇場を持つ体制での設立が実現した。建物だけの日本の公共ホールを作るのではなく、世界に通じる作品を創るための人材と環境を作る、という前提を踏まえ、SPACでは、国内外の優れた作品の紹介をミッションとして、開館当初から海外から積極的にアーティストを呼んでいた。具体的には、海外作品の招聘もあれば、SPACのメンバーと国内外のゲストアーティストによるコラボレーションのための滞在制作もあった。劇場としてのこの姿勢が、宮城氏にも引き継がれ、今日まで同様の滞在制作を継続している。

## (2) 事業の目的や理念

プログラムの目的は、舞台芸術作品の創造・上演を行うとともに、優れた舞台芸術の紹介や舞台芸術家を育成すること。SPACの理念は、劇場は作品を通して世界で今何が起きているのかを知ってもらう世界の窓であるというものである。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

滞在制作を主に行うのは「SPAC-ENFANTS」及び「SPAC 秋→

春のシーズン」。滞在期間は1～2ヶ月程度。毎年ゴールデンウィークに実施される「ふじのくに⇄せかい演劇祭」でも、年度によっては滞在制作を実施する。対象アーティストは、主に演出家・振付家。作品によって、音楽家・美術家・照明家・衣裳家も招聘する。対象ジャンルは演劇がベースで、言葉や物語性のような演劇的要素のあるダンスも対象となる。プログラムは芸術総監督が提案し、スタッフとの意見交換も経て決定する。

創作環境を整え十分な創作期間が確保された中で招聘アーティストとSPACの俳優及び技術スタッフが出会うことで、今まで発見されていなかったお互いの可能性を引き出す挑戦に取り組み、新しい作り方を生み出しながら成長することを滞在制作では重視している。動員数や収入額といった数字にとらわれず、純粋に作品やプロセスを見つめられること、短期間で表れる成果を追うのではなく、長期的な展望のもとで事業を行なえることが、公共劇場において滞在制作を実施する意義であるとSPAC制作部・中野氏は語った。

## ① SPAC-ENFANTS

「SPAC-ENFANTS」(スパカンファン)は、オーディションで選ばれた静岡県の中高生とともに新しい舞台を創造する、SPACによる国際共同制作プロジェクト。フランスを拠点に国際的な活動を展開する振付家・ダンサーのメルラン・ニヤカム氏を迎え、2010年にスタートした。「世界中の子どもたちが未来への希望を取り戻すことができるダンス」をコンセプトに、芸術表現として世界に通用するメッセージを持ったダンス作品を目指し、毎年夏に実施されている。

## ② SPAC 秋→春のシーズン

「SPAC 秋→春のシーズン」では、秋から年度末にかけて、毎年4～5演目の公演を実施している。そのうち2演目程度で国内・海外から演出家等を招いて1～2ヶ月で滞在制作を行っている。この滞在制作では演出家以外にも俳優やデザイナー等、座組の半分程度SPAC以外のメンバーを迎えて創作を実施する場合もある。

秋から年度末にかけてのシーズンは、平日は県内中高生の招待公演、土日は一般公演となっている。企画として重視しているのは戯





『変身』(演出:小野寺修二)リハーサルより 2017年 photo: Masashi Hirao



『変身』舞台写真 静岡芸術劇場 2017年 photo: Y.INOKUMA

曲の選定で、このシーズン作品を見続けることで、演劇の名作に触れられることを意図し、古典作品や将来の古典たり得る同時代作品を演目としている。シーズンプログラムの戯曲及び演出家は、芸術監督のアイデアを元に、芸術局長、制作部及び創作・技術部各主任、ほかチーフ級スタッフとの協議で決定される。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

海外からアーティストを招聘する際は、渡航費を負担する。招聘アーティスト側で得た助成金で渡航する場合もある。基本的に日当の支給があり、SPACの宿泊施設も提供される。宿舎から劇場までは離れているので、車での送迎もある。舞台費、広報関連費用、公演パンフレット制作等はSPACで負担し、滞在成果は基本的に有料公演として公開する。SPAC-ENFANTSでは、ワークインプログレス公演を行う場合もある。技術スタッフ、制作スタッフ、SPAC俳優との協働により創作は行われる。プロジェクトごとの記録等は原則作成していない。

国内外のアーティストが劇団SPACというレジデントカンパニーと滞在制作を行うことで、地域の観客に、既知の出演者であるという「ホーム」感の上で、作品によって異なる様々な演出手法で舞台芸術の新たな側面に触れる機会を提供している。地域の観客にとっては初めて知る演出家の作品でも、SPACの作品だから、好きなSPAC俳優が出るからという理由で観劇する観客も多い。

## (3) 滞在アーティストの成果や効果

アーティストの滞在中は、SPACの俳優及び技術スタッフと密なコミュニケーションが交わされる。一例として、振付家の小野寺修二氏が2011年に『オイディプス』を創作した際には、SPACの俳優の身体性と、小野寺氏の身体へのアプローチをすりあわせるため、8月に約10日間の稽古を行ったうえで、公演前の1か月半前にあたる10月初旬からまた稽古を実施した。一度稽古をした後にお互いに考える時間をとることで創作を深めることができ、また長期間の稽古によって信頼関係が厚いものになった。その後2014年の『変身』の滞在制作では、『オイディプス』で築いた関係をベースとして、言葉・身体ともに、より挑戦的なアプローチをしながら創作していくことが出来た。なお、これらの作品に携わったSPAC創作・技術部の舞台美術

家や衣裳家は、その後、小野寺氏の他館での上演作品にも携わっている。

滞在アーティストは、SPAC側のメンバーの意見を交え、静岡の観客の性格や反応も考慮しつつ、普遍的に伝わる表現を模索しながら創作を行う。この例として、インドネシアの演出家ユディ・タジュディン氏が『サーカス物語』及び『パール・ギュントたち』を創作した際の事例がある。『サーカス物語』の創作において、観客の感想を受けたSPACメンバーから次の意見があった。「舞台を見慣れていない人も多い静岡の観客に向けては、今創作している作品を上演する際には全体の構造のヒントを提示しておく必要があるのではないか。冒頭で内容を追うことを諦めてしまうと、その観客は今後SPACに来ない」。この意見を踏まえ、2013年の初演では開演前に前説を行ったが、2016年の再演においては、作品に組み込んだ導入を作り、俳優が紹介する形式をとった。2019年にタジュディン氏が『パール・ギュントたち』を滞在制作した際、同様の説明を作品に盛り込む発想が演出家の中に前提としてあり、作品の冒頭で台詞の一部としてあらすじをしゃべる構造となった。

滞在制作を経験したアーティストとは継続した関係性を築くことが多い。『パール・ギュントたち』はタジュディン氏からの提案で企画が決定した。また、2018年度に滞在制作されたレパトリー作品『妖怪の国との与太郎』はSPACで自作の上演を重ねたジャン・ランベール＝ヴィルド氏からの提案で創作された。滞在制作の成果としては、SPAC側のメンバーを含めてアーティストがいかに学びを得たのか、再演やツアーがどれだけ行われ、国内外への発信がされたのか、を重視している。

## 3. 運営体制

### (1) 事業のスタッフ構成

劇場としての総職員数は、制作部、創作・技術部、演技部、文芸部をあわせて約70名(演技部の俳優は基本的に作品ごとの契約のため、年度の中でも人数に変動がある)。滞在制作の専任スタッフはいない。年間の上演作品・プロジェクトが決まった際、適性やスケジュールを勘案し、都度制作部内で担当者を決定する。創作・技術部から担当するデザイナー/スタッフについても同様。



『ペール・ギユントたち ～わくらぼの夢～』(上演台本・演出：ユディ・タジュディン)  
リハーサルより 2019年



『ペール・ギユントたち』舞台写真 静岡芸術劇場 2019年 photo: K.Miura



『SPAC-ENFANTS-PLUS』メルラン・ニヤカム氏(演出・振付)と参加メンバー 2019年



『SPAC-ENFANTS-PLUS』創作ワークショップ成果発表会より  
舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」2019年 photo: 猪熊康夫

## (2) 施設構成

制作スタジオとしては、静岡芸術劇場内リハーサル室及び、舞台芸術公園内に2ヵ所の稽古場がある。宿泊施設はシングルルーム約30部屋、ツインルーム3部屋。それに加え、次の4つの劇場を擁している。「静岡芸術劇場」、野外劇場「有度」、屋内ホール「楢円堂」、「BOXシアター」。

## 4. 現状の課題・今後の展望

### (1) 現状の課題

戯曲という演目ありきで十分な創作時間を確保しているため、滞在制作で得るものは多い。その一方で、「創作→上演」という流れの枠内での創作になっていることや、静岡ならではのリサーチに時間をかける創作があまりないことが中野氏から課題として挙げられた。市街地を離れ自然に囲まれた舞台芸術公園をはじめとして創作に集中し没頭できる環境を提供できる一方で、滞在中の地域との交流があまり持てないことも多い。

また、静岡県内でSPACの認知度があまり高くないことも課題。3年に一度実施される、静岡県の文化施設認知度調査では「SPACを知っている」と回答する県民は21.2パーセント、「知っている」と回答した人の中で「鑑賞したことがある」のは、10.5パーセント(ともに平成30年度調査結果)であり、たとえば静岡県民であれば大体が存在を知っている県立美術館の認知度には大きく後れをとっている。

劇場の会員は年間約300名で、そのうち半分程度は継続しての会員。SPACの客席規模や公演数に比すると、存在が浸透しているとは言いが、日常的に来場する観客が少しずつ増加してはいる。

### (2) 今後の展望

今後の展望としては、常に新しいものを覗ける作品を上演する劇場でありたいと考えている。SPACのメンバーが色々なものに触れ、アーティストとして成長し続けることを志向している。中野氏は以下のように語る。「長期的には、中高生の鑑賞事業で鑑賞した子どもが家で感想を言い、その子どもたちがなにか一瞬でも覚えていて、その子どもたちの子どもがまたSPACの作品を観劇し、会話が生まれていくとよい、と芸術総監督の宮城が話すことがある。「よく覚えていない」から「なんとなくここを覚えている」の割合を増やしていき、面白かったからまた観ようかなという気軽さで、地域住民にだんだん演劇になじみを持ってほしい」。

インタビュー日時：2020年10月6日(火) 13:15～14:30  
インタビュー対象：中野三希子(SPAC-静岡県舞台芸術センター 制作部)  
レポート作成・聞き手：朴建雄・稲村太郎(セゾン文化財団)



## AIR事業・運営団体データ

開始年	2018年
事業名	レジデンスアーティスト育成事業2021、PEEPSHOW ～アーティストの素顔を覗き見る、ARTIST NEST
対象分野	ダンス、パフォーマンス
募集方法	公募、指名
年間滞在人数/組	10人(2019年実績)
年間派遣人数/組	7人(2019年実績)
所在地	愛知県名古屋市中村区長戸井町4丁目38 黄金4422BLDG.
URL	<a href="https://ja-jp.facebook.com/Kogane4422/">https://ja-jp.facebook.com/Kogane4422/</a>

## 1. 設立趣旨

ダンスハウス黄金4422は2017年の5月に設立された。当初の構想では愛知のアーティストを集め、ビルをアートでリノベートする予定だったが、アーティストが集まらず事業計画が変更となった。ダンスハウスとしてダンスに特化すると決定されたのは2017年12月で、半年間かけて地元の大学と産学協同プロジェクトとしてリノベーションが行われ、2018年5月にダンスハウスとしてスタートした。レジデンスプログラムのほか、海外アーティストを招聘してのワークショップ事業、公演事業、中高生育成事業、オンライン配信事業、アジアのフェスティバルやカンパニーと連携したエクステンジブプログラム等を実施している。

また、アーティストとしての浅井氏自身の経験も設立に大きく影響している。キャリアの初期に日本で活動していた際、海外公演や国内での制作費補助やレジデンスの機会がなかったため、チャンスを探して海外に行こうと決断したことから、自分が欲しかったものや、こういうサポートがあったらという思いを形にしている。

## (1) 事業の趣旨や経緯

ダンスハウス黄金4422主宰者の浅井氏は、ヨーロッパでダンサーとして活動する中で、ほとんどの作品をレジデンス施設との協働で制作した。アーティストは滞在してクリエイションができ、地域住民はオープスタジオないしワークインプログレスにより質の高い芸術を無償で享受できるというwin-winの関係をそこで実感したことから、日本のコンテンポラリーダンスにおいてもレジデンスは有効に機能するとの考えに基づき、開始した。

## (2) 事業の目的や理念

ダンスハウス黄金4422のレジデンスプログラムは、マルチタスクプレイヤーとしての振付家育成及び、日本の若手振付家が海外で公演を行うチャンスの創出を目的としている。前者に関しては、振付家は総合芸術を創る演出家として照明・音響・舞台美術・アートマネジメント及びアドミニストレーションを理解している必要があるとの浅

井氏の理念により、社会の動向に流されず自分の場を自分で作る振付家の育成を志向している。後者については、国内だけでなく海外の観客にも評価され見られる経験がアーティストには重要であるとの考えに基づき、アジアのプラットフォームとして成長するネットワークを形成している。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

ダンスハウス黄金4422で実施されているプログラムは、レジデンスアーティスト育成事業、映像に特化したPEEPSHOW、国際プログラムのARTIST NEST、の3つ。対象分野はコンテンポラリーダンス及びパフォーマンスで、選考は浅井氏によって行われる。選考基準としては芸術としての強度、オリジナリティ及び実現可能性が重視され、地域性や社会性にはあまり焦点を当てていない。滞在期間は招聘プログラムで20日間、派遣プログラムで14日間。アウトプットがあることがすべてのレジデンスの条件であり、「発表はなくても構わないが、どういったものを探求しているのかというプロセスに意味がある」と浅井氏は語る。

また、海外のダンサー及び振付家から内々のオファーを受け、レジデンスとして受け入れることも多い。こうした海外アーティスト対象のプライベートなレジデンスでは滞在中にワークショップまたはワークインプログレスを実施するが、公募はしていない。

## ① レジデンスアーティスト育成事業

JCDN(ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク)による「ダンスに行こう」プログラムの一環として実施。日本で活動している38歳までの若手振付家をレジデント・アーティストとして招聘し、照明・音響・制作の基本的な知識とオペレーション技術に関するレクチャーを滞在制作中に受け、それに基づいて成果発表を行う。選考は公募による。



ダンスハウス黄金4422アーティスト・イン・レジデンス2018 トーマス・ブラッドリー、松岡大  
ワークインプログレスショーイング「CLAY」ダンスハウス黄金4422 2018年 写真：佐藤良祐



ダンスハウス黄金4422アーティスト・イン・レジデンス2019 藤澤拓也、井田亜彩実、鈴木竜、杉浦ゆら、  
Chan Chi Cheng「ミラージュ」ダンスハウス黄金4422 2019年 写真：佐藤良祐

## ② PEEPSHOW～アーティストの素顔を覗き見る

稽古場での創作プロセスをアーティストが語る映像を配信するプログラム。自分のメソッドを明確に言語化できる中堅以上のアーティストを対象とし、公募による選考と浅井氏によるキュレーションを半々の割合で実施。キュレーションを入れている理由は、公募だけでは、自分の作品やメソッドを言語化できるアーティストが十分に集まらないと考えたため。

## ③ ARTIST NEST (国際プログラム)

日本・韓国・マカオの三つのフェスティバルの連携により実施している事業。韓国の科学都市テジョンのKAIST (韓国科学技術院) と連携し、科学技術者と日本・韓国・マカオのダンサーでクリエーションを行う。韓国でレジデンスをする形で、日本からはアーティストを派遣する。科学技術や韓国・マカオとの国際共同製作に興味を持つ愛知県のダンサーを主に対象として公募を実施している。

### (2) 滞在アーティストの活動や支援

4つのレジデンスプログラムの滞在アーティストはダンスハウス黄金4422の設備を24時間利用可能。常に施設についている浅井氏がスタッフとしても対応し、照明等の機材も都度利用できる。また、ARTIST NESTについては宿泊費、日当、交通費の支援がある。アジアのネットワークでの連携が多いため、レジデンスで制作された作品をアジア圏のフェスティバルに推薦・紹介し、ツアーに回すアフターケアの努力をしている。紹介先としては、1回のパフォーマンスで謝金が5万円から10万円程度のフェスティバルが主となる。

ダンスハウス黄金4422は出会いの場でもあり、複数のアーティストが同時に滞在することも多い。3つのスペースでレジデンスが同時進行し、食事を共にすることで、新しくつながる場合もある。ただ、施設の管理をする必要があるため、浅井氏にダンサーとしての仕事がない時しかレジデンスは実施できない。アーティストによって集中する時間帯は違い、10時から17時までリハーサルを5～6人のグループで実施するチームもあれば、昼間は外出し、夜中だけ創作をする振付家もいる。「24時間場所を自由に使えるので、みんなバラバラに活動して、家みたいな生活スタイルをしている」と浅井氏は語った。夜中の3時から4時まで稽古しているアーティストも少

くない。

ダンスハウス黄金4422のレジデンスでは、自分と向き合って創作をしたいという滞在者が多い。観光資源が少ない地域なので、リサーチをするアーティストは少ないが、リサーチのために浅井氏が車を出すこともある。また、滞在アーティストから、浅井氏に対してセカンドオピニオンの作品を見てほしいとの要望もよく寄せられる。この際、浅井氏はダンサーではなくあくまでもダンスハウス黄金4422のスタッフでありプロデューサーとして作品を見るようにしている。作品に関する話は長時間に及ぶことも多い。

## (3) 滞在アーティストの成果や効果

### ① レジデンスアーティスト育成事業

滞在アーティスト同士でアヴィニョン演劇祭等のフェスティバルと一緒に作品を作るケースもある。具体例としては、2017年に滞在した若手の女性ダンサーが、同時期に滞在していたフランス在住の浅井氏のカンパニーダンサーのフランスツアーに同行するという事例があった。

### ② PEEPSHOW～アーティストの素顔を覗き見る

公募に応じ、ダンサーの京極朋彦氏が参加。韓国の伝統舞踊に感銘を受け作品を作っていることから、名古屋を中心に活動している朝鮮韓国伝統音楽グループ「ノリバン」をリサーチした。PEEPSHOWの配信では、10年前と現在の創作のポイントを比べながら解説した。

### ③ ARTIST NEST (国際プログラム)

日本、韓国、マカオの3カ国からさらに中国へ新しい連携を拡げ、2020年現在ダンスハウス黄金4422レジデンスコレオグラファーである井田亜彩実氏が2020年1月に中国・広州の「二高表演Ergao Dance Production Group」開催された第7回DANCE CAMPのワークショップ講師として参加した。二高表演Ergao Dance Production Group (EDPG) は2007年に中国広州でダンサー / 振付家のErGaoによって設立された。EDPGはダンス作品の制作やビデオダンス、コミュニティアート、教育プログラムを中心としたダンスプロダクションであり、ダンスセンターである。





小尻健太ダンスワークショップ ダンスハウス黄金4422 2019年 写真：ダンスハウス黄金4422



ダンスハウス黄金4422アーティスト・イン・レジデンス2019 井田亜彩実 ワークインプログレス  
ショーイング「スピーシーズ」 ダンスハウス黄金4422 2019年 写真：ダンスハウス黄金4422

#### ④ 海外アーティスト対象のプライベートなレジデンス

フランスのエマニュエル・ガット・ダンスカンパニーでメインダンサーを務めるトーマス・ブラッドリーが滞在制作及びワークショップを行った。ダンスハウス黄金4422で手伝いをしてきている愛知県在住の73歳の男性を気に入り、現在は共にワールドツアーを回っている。

### 3. 運営体制

#### (1) 事業のスタッフ構成

スタッフは総勢4名。常勤スタッフは浅井氏のみで、もう1人のスタッフがリモートで勤務しており、週に1回ほど施設に来る。他のスタッフはライターとデザイナー。それぞれ専門技能が分かれている。

#### (2) 施設構成

元縫製工場をDIYによってリノベーションした建物。劇場、スタジオ、ギャラリー、宿泊施設からなる5階建てのアーティストプラットフォーム。

### 4. 現状の課題・今後の展望

#### (1) 現状の課題

元来、ダンスハウス黄金4422が地元のダンサーの溜まり場となり、年間、数多く訪れる海外アーティストと自然に繋がりが広がっていくプラットフォームになることを構想していたが、閉鎖的な傾向にある愛知のローカルなダンスコミュニティと繋がることが少なく、地域との結び付きが課題となっている。

ARTIST NESTをはじめとするエクスチェンジプログラムについては、派遣アーティストとして舞踏を紹介できる浅井氏が指名されるケースが多く、浅井氏以外のアーティストに機会を広げるのがこれからという課題がある。エクスチェンジプログラムに関しては交流先と考え方や価値観が合わず失敗することも少なくない。ゴールを明確化し迅速に実施されるプロジェクトが多い一方で、計画性が薄くなる傾向もある。

#### (2) 今後の展望

「国内だけでなく海外の観客に対しても作品を発表し見られる経験がアーティストには重要である」との考えに基づき、今後の展望と

して、アジアのネットワークの形成と振付家育成の2つを志向している。具体的には、「アジアのプラットフォームとして成長するネットワークの形成」及び、「総合芸術を創る演出家として照明・音響・舞台美術・アートマネジメント及びアドミニストレーションを理解した、社会の動向に流されず自分の場を自分で作る振付家の育成」。マルチな振付家の育成について、浅井氏は「誰でもできることでもないもの分かっているが、10年に一人くらいそういう方が出てきたらいいなと思っている」とも語った。

### 5. 特記事項

#### (1) 企業との協賛に関して

ダンスハウス黄金4422の事業は、リンナイ株式会社、株式会社マキタ等の愛知県の製造業から協賛を得ているものが多い。カレーハウスCoCo壱番屋からは常時協賛を得ている。また、近隣の健康器具メーカーにインフルエンサー的に活躍するダンサーやバレリーナを紹介し、合わせてダンスと美容を掛け合わせた商品開発をすることで協賛を求めるアプローチも実施している。どの協賛依頼も、基本的には地域に対してなんらかの還元や連携を図っていくことを前提にしている。協賛で得られる金額はPEEPSHOW等の事業ごとに100万円程度。金銭的なものでなく、工具や場所の提供を受ける場合もある。浅井氏のカンパニーでは、マキタから舞台美術製作用の工具の提供を受けている。愛知の企業はほとんどが友好関係を結んでおり、商工会議所での繋がりも強い。そのため、浅井氏の協賛依頼が企業理念に合わない場合でも、依頼を受けた企業の担当者が近い理念の企業を商工会議所内で紹介してくれることが多い。

愛知は元来産業の県であるため、官民のパワーバランスが釣り合っているという。そのため、行政と企業が牽制しあうことが愛知では多く、企画等が全く進まないことも多々ある。行政にパイプがない場合、上場企業は全く動かない場合もあるという。浅井氏は名古屋市観光文化交流特命大使でもあるため、行政と企業に対しバランスのとれたアプローチをすることが可能になっている。

インタビュー日時：2020年10月1日(木) 15:00～16:30  
インタビュー対象：浅井信好(ダンスハウス黄金4422代表・舞踏家・振付家・演出家)  
レポート作成・聞き手：朴建雄・稲村太郎(セゾン文化財団)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2017年
事業名	豊橋アーティスト・イン・レジデンス ダンス・レジデンス
対象分野	ダンス、パフォーマンス等
募集方法	公募、指名(年間4～5組程度のうち2組程度は指名)
年間滞在人数/組	5組(2019年実績)
所在地	愛知県豊橋市西小田原町123番地
URL	<a href="https://www.toyohashi-at.jp/archive/index.php">https://www.toyohashi-at.jp/archive/index.php</a>

## 1. 設立趣旨

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

穂の国とよはし芸術劇場PLAT(以下、「PLAT」と表記)は2013年に開館。その基本計画において、アーティスト・イン・レジデンスに関する言及があったが、開館の際にはレジデンス事業は導入されなかった。

2016年に豊橋市の文化振興指針が改訂し、「アクションプラン」の中に「アーティスト・イン・レジデンス事業の実施」の文言が盛り込まれた。PLATでレジデンス事業の実施の機運が高かったのは、劇場に専属の芸術監督、劇団、アーティストを置いていないことに加え、地域周辺で活動するアーティストが少ないこと、大きな予算で公演をプロデュースすることも難しい体制であるため、大規模ではない予算組みで行政に訴求力のある劇場の主催事業が求められたことによる。創造のプロセスが主活動であるレジデンスを実施することによって公演事業だけではみえないアートの可視化を目指している。

2016年のあいちトリエンナーレの際に、ままごととスイッチ総研がPLATで「豊橋アーティストインレジデンス2016」を行った。この事業に関しては、成果の見えづらさが行政から指摘されたため、アーティストが来て創作することがわかりやすいダンスやパフォーマンスに焦点を当てたプログラムとして、2017年に豊橋市の事業を豊橋文化振興財団が受託する形で、300万円が予算措置されダンス・レジデンスが立ち上げられた。

## (2) 事業の目的や理念

アーティストへの支援・育成及び、アーティストと市民との交流の機会を設け、新たな創造と交流を生み、舞踊・身体表現および地域の魅力を広く発信すること。公演事業とレジデンス事業を車の両輪と考えている。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

事業名は「豊橋アーティスト・イン・レジデンス ダンス・レジデンス」。対象分野はダンスをはじめとする身体表現による舞台芸術、

パフォーマンスなど。選考は公募と指名を織り交ぜて実施され、年間4～5組程度のうち2組程度は指名。書類による一次審査と、面談による二次審査がある。アーティストへの宣伝には力を入れており、ベテラン・30代中堅・若手を意識してどの層もだいたい同じくらいの割合で採っている。年齢制限はない。先鋭的というより、優れた作品性/日本の舞台芸術にとって必要な人材育成である/将来性/国内外への波及効果が期待される、などの点において、担当者が一緒に面白いことができそうな人を選び、豊橋が持っている資源をどう活用できるのかを重視している。滞在期間は平均12日程度。また、ビジュアルを活用したレジデンスの時空間が伝わるような報告書を毎年度作成し、劇場ウェブサイトで公開し、全国の文化施設へ無料配布している。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

支援として、日当を滞在中全員に支給する。滞在中は、担当スタッフによるサポートがある。スタッフは創作方法に応じて柔軟に対応するようにしている。地域の文化資源の紹介を行ったり、要所要所で稽古場を訪れ、観客として意見を言ったりすることもある。アーティストはスタジオにこもるタイプと外に出るタイプに分かれる。前者の例としては、鈴木ユキオ氏、長谷川寧氏、康本雅子氏などが挙げられる。創作スタイルとしてはこもるが、市民参加のワークショップはオープンに行うアーティストも多い。外に出るタイプのアーティストとしては、木村玲奈氏が自ら事前下見を重ねて興味をもった場所やスタッフに紹介された場所に連日足を運び、喫茶店で交渉してパフォーマンスを行うなどした。中村蓉氏も、「きょうのとよはし」という野外でのパフォーマンス映像の連作を発表した。

## (3) 滞在アーティストの成果や効果

滞在条件としてワークショップと成果発表をアーティストには課しており、レジデンスの成果を市民へ丁寧に紹介している。アーティストの要望に応え、豊橋市美術館でパフォーマンスや撮影を行うこともあった。滞在後の活動としては、創作した作品の上演がほとんどだが、2017年に中村蓉氏が滞在制作で創作した『理の行方』が、





PLAT外観



PLAT創造活動室A



カンパニーデラシネラ ワークショップ&ショーイング  
『甘えの構造』PLATアートスペース 2019年度



木村玲奈/『どこかで生まれて、どこかで暮らす。』プロジェクト  
成果発表会 大豊商店街「みずのうえ」 2018年度



鈴木ユキオ / YUKIO SUZUKI projects 稲古場公開  
PLAT創造活動室A 2017年度

関東学生舞踊連盟発表会の招聘作品としてリクリエーションされ、上演を重ねた事例がある。

PLATがアーティストに求める成果は、滞在後に作品を創作し国内外に進出していくことだが、公演が決まっていることを滞在条件にはしていない。リサーチであっても、将来性、国内外への波及効果、地域資源の活用などが期待され、アーティストの切実さがあり、公的に支援すべきことであれば採用する。アーティストの長い道筋の中の、最初の根が生まれる部分にPLATがあればいい、と思っており、公的支援としてそれが重要だと考えていると上栗氏は語った。

### 3. 運営体制

#### (1) 事業のスタッフ構成

担当スタッフは3名。滞在アーティストまたはグループごとに、1名のスタッフが対応。

#### (2) 施設構成

PLATでは、創造活動室が7部屋あり、そのうち2部屋をダンス・レジデンスで使用している。宿泊施設はPLATと所縁のあるアーティストの繋がりや、一軒家を賃貸契約し、事業の際だけ借りている。和室が1つと、洋室4つを備えている。また、人数や状況に応じて1DKの賃貸アパートを契約する場合もある。主ホール(778席)、アートスペース(266席)も内容によって利用可能。

### 4. 現状の課題、今後の展望

#### (1) 現状の課題

課題としてまず挙げられたのは、PLATの他の主催事業とレジデンス事業とのバランスのとり方である。主催事業の柱は公演・教育普及・レジデンスの3つあり、レジデンスの件数を増やすには職員と施設が不足している。滞在アーティストのスタジオは貸し施設から確保するので、施設の空きがない場合は実施できない。また、3つの事業の掛け合わせを可視化することも課題となっている。

#### (2) 今後の展望

今後の展望としては、レジデンスから公演につながる流れを作ることや、豊橋市の姉妹都市であるドイツのフォルクスブルク市のような海外機関との交流を構想している。他のレジデンス施設との共同企画でアーティストが各地域のレジデンスを巡るプログラムの立ち上げも考えている。

インタビュー日時：2020年10月2日(金)13:00～15:00

インタビュー対象：上栗陽子(公益財団法人豊橋文化振興財団 事業制作部 事業制作リーダー)

レポート作成・聞き手：木建雄・稲村太郎(セゾン文化財団)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2000年
事業名	京都芸術センター アーティスト・イン・レジデンスプログラム
対象分野	全芸術分野(公募プログラムはパフォーマンス・アーツとビジュアル・アーツを隔年で募集)
募集方法	公募、推薦(エキスチェンジプログラムの一部)
年間滞在人数/組	5人(2019年実績)
年間派遣人数/組	4人(2019年実績)
所在地	京都府京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 京都芸術センター
URL	<a href="https://www.kac.or.jp/">https://www.kac.or.jp/</a>

## 1. 設立趣旨

京都芸術センターは、京都市、芸術家、その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して2000年4月に開設された。当時の演劇人(松田正隆氏、土田英生氏、鈴江俊郎氏ら)等から京都市に舞台作品を制作する場所が必要であるという声があがり、そういった芸術家からの直接の声が、京都市として京都芸術センター設立の大きな後押しになった。建物が小学校としての役割を終え閉校したのは1993年。その後「芸術祭典・京」をはじめとした芸術事業での活用を経て2000年に京都芸術センターとして設立された。設立時のプログラムには制作や練習の場である「制作室」の提供、国内外の芸術家を招聘するアーティスト・イン・レジデンス・プログラム、伝統芸能のプログラム「継ぐこと・伝えること」等がある。

京都芸術センターでは、多様な芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図ることを目的としている。主な特徴としては、以下の3つが挙げられる。このような活動をとおして、京都芸術センターは、

- ・ジャンルを問わない若い世代の芸術家の制作活動の支援
- ・さまざまなメディアを用いた、芸術文化に関する情報の収集と発信
- ・芸術家と市民あるいは芸術家相互の交流の促進

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

「京都芸術センター アーティスト・イン・レジデンスプログラム」は2000年の設立当初から実施されている。アーティスト・イン・レジデンスプログラムについては、海外の主要な先行事例であるヴィラ・メディチ(ローマ)やシテ・アンテルナショナル・デ・ザール(パリ)が参照された。若手の芸術家が京都に滞在し、刺激を受けながら制作を行う機会を提供すること、芸術家同士または芸術家と市民との交流促進を目的として導入された。

## (2) 事業の目的や理念

異なる文化に触れることで新しい芸術表現を生み出そうとする新進または若手のアーティストや芸術分野の研究者等の滞在創作活動を支援することを目的としている。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

「京都芸術センター アーティスト・イン・レジデンスプログラム」では、公募プログラム及びエキスチェンジプログラムを実施している。アーティストの選考は外部審査員を交えた選考委員会を経て決定する形で行われる。エキスチェンジプログラムの一部では連携先機関のキュレーターからの推薦も含む。渡航費は往復エコノミー料金を実費で支給する。

## ① 公募プログラム

公募プログラムでは、異なる文化に触れることで新しい芸術表現を生み出そうとする新進または若手のアーティストや芸術分野の研究者等を、ビジュアル・アーツとパフォーマンス・アーツの分野から隔年で募集している。国籍や年齢等の制限はない。滞在期間は2-3ヶ月で、募集期間は4-6月。

## ② エクスチェンジプログラム

エキスチェンジプログラムは、以下の4つ(2020年度時点)。対象分野は全芸術分野。滞在期間は1-2ヶ月で、募集時期はプログラムにより異なる。

・アーティスト・イン・レジデンスプログラム／エキスチェンジ：ARTSPACE(2017-)

Australia Council for the Arts及びARTSPACE(オーストラリア・シドニー)との共同プログラム。公募によって相互にアーティストを選出し、2ヶ月のレジデンス支援を行う。

対象：ビジュアル・アート

・アーティスト・イン・レジデンスプログラム／エキスチェンジ：





京都芸術センター 外観



京都芸術センター 制作室の例



Alain Michard, Mathias Poisson「プロムナード・ブランシュ・キョウト」2017年  
Photo:Kai Maetani



J Triangular「Kyoto Makai: Ghostly Japan」ワークショップ 2019年

### Quartier am Hafen(2016-)

アーティストの制作スタジオを運営するQuartier am Hafen(ケルン・ドイツ)と連携し、アーティストを相互に派遣するプログラム。

対象：全芸術分野

- ・アーティスト・イン・レジデンスプログラム／エクスチェンジ：GRANER(2017-)

ダンスとライブ・アートを専門とするアートセンター GRANER(バルセロナ・スペイン)との共同プログラム。

対象：ダンス、パフォーマンス

- ・アーティスト・イン・レジデンスプログラム・イン・パリ(2019-)

おおさか創造千島財団、ヴィラ九条山と連携し、シテ・アンテルナショナル・デ・ザール(パリ・フランス)での滞在制作を希望するアーティストを2組派遣する。

対象：全芸術分野

### (2) 滞在アーティストの活動や支援

公募プログラムでは10万円の制作費助成がある。エクスチェンジプログラムは連携先により条件が異なる(渡航費、制作費、日当等)。また、アーティスト1組につきコーディネーター 1人がパートナーとなり、飛行機のチケット手配から発表まで全てを担当する。人の紹介やインタビューの付き添いも行うほか、レジデンスの滞在条件となっている市民交流の方法の相談も行う。市民交流の方法は、

アーティストによって違い、ワークショップ、公演、オープンスタジオと多様。

京都芸術センターならではの活動事例としては、ソウルダンスセンターとのエクスチェンジで来日した韓国からのダンサーの例がある。ダンスの再現性に興味を持ってリサーチしていたこのアーティストは、能や伝統芸能を毎週のように観劇した。再現性、憑依性に関する口伝えでの振付ワークショップを毎週継続して実施し、振付がどれくらい変化するかも実験した。このワークショップは参加してくれる若いダンサーが京都にたくさんいたからこそ可能となった。最終的な成果発表は行わなかったが、レジデンスならではの時間の使い方として、毎週末に少しずつ変わる公演のような実験ができた。

こうしたレジデンスならではのゆっくりしたプロセスの活用は、近年の傾向である。レジデンスプログラムが始まった頃は、最後に発表を希望するアーティストが多かったが、最近のアーティストは少しずつ小さなプロセスを探したり、地元でコラボレーターを探してじっくり話し合ったりする傾向にある。かたちになくしては、という強迫観念がアーティストからなくなってきている。

### (3) 滞在アーティストの成果や効果

レジデンスがきっかけで、新しいコミュニティが生まれた事例として次の例が挙げられる。2007年、米国から来日した振付家のリズ・ラーマン氏が、3ヶ月間の滞りで地域住民とコミュニティダンス作品



Ji Yoon Yoo 「Lost Performance」 2019年 Photo: Toshiaki Nakatani



京都芸術センター制作室使用の例 Photo: Nobutada Omote



「The Instrument Builders Project: Circulating Echo」 2018年 Photo: Takuya Matsumi



「The Instrument Builders Project: Circulating Echo」 2018年 Photo: Takuya Matsumi

を創作した。協働した地域住民は彼女の帰国後も自主的に活動が続け、コンテンポラリーダンスカンパニー Kyoto Dance Exchange を結成した。この団体は老若男女を問わず、様々な職業のアーティストを本業としないメンバーによって構成されている。10年以上継続しており、今でも定期的に稽古をしている。また、アメリカ公演も実施した。振付家をゲストと呼んだりもしている。学区の文化祭で、コンテンポラリーダンスが演目となるのが恒例になっている。

京都芸術センターではレジデンスでの成長とその後の成果両方に注目しており、一度レジデンスに参加したアーティストがまた戻って発表する機会も創出したいと考えている。例としては、4-5年前にプログラムに参加したアーティストへ展覧会への出展の依頼や、スペインの施設とのエクスチェンジプログラムに参加した相模友士郎氏の成果を踏まえた公演のプロデュースがある。

レジデンスプログラムの成果・効果としては、アーティストがきちんと実験をして、それがキャリアアップにつながることを重視している。鑑賞者数で成果を判断することのないよう、レジデンスでの試行が数年後に作品になったケースを長期的に追跡し積極的に動向調査している。

### 3. 運営体制

#### (1) 事業のスタッフ構成

京都芸術センターでは31名の職員が働いており、そのうち、レジ

デンス事業をはじめ、企画運営を担当するスタッフは常勤9名。京都芸術センターを指定管理者制度で管理運営する公益財団法人京都市芸術文化協会職員で、アートコーディネーター(6名)は3年上限の契約で雇用されている。各スタッフは展覧会事業や伝統芸能関連事業等、他にも数多くの業務を同時に担当しており、レジデンス事業専任のスタッフはいない。

業務量は多く、レジデンス事業に専念できないもどかしさはある。他の事業との兼ね合いで現状ではあまり実現していないが、他の機関と運営でもっとコラボレーションをしたいと考えている。

#### (2) 施設構成

12室の制作スタジオがあり、ギャラリー、講堂などの多目的スペースも利用可能。宿泊に関しては近隣のマンションを都度賃貸契約して提供している。

## 4. 現状の課題・今後の展望

#### (1) 現状の課題

現状の課題は、大きく分けて3つある。第一に、レジデンス事業の文化行政的な意義を適宜、ステークホルダーに伝えることが挙げられる。京都市の担当者は毎年変わるので、予算獲得のため特に丁寧な説明が必要となる。また地域住民に協力を仰ぐ際にも、レジデンスの意義を説明する必要がある。第二に、レジデンス専門で働け



る環境の創出も課題である。ビザ関連の処理等、共有知とできることは多く、ノウハウがシェアされることで、公的機関でなくてもレジデンス運営が可能になり、人材の育成につながるのではないか。第三に、レジデンス同士の連携やネットワークをいかに活性化させるかという課題がある。既存のネットワークには機能していないものも多い。ネットワークありきでなく、メンバーがみな主体性を持ってやりたいことをぶつけ合うことで、それぞれに利益が生じる仕組み作りが重要である。

## (2) 今後の展望

将来の展望について、本年度の具体的な事業に関しては新型コロナウイルス感染症のため実施できておらず、今後の見通しはついていないが、海外とのネットワークをさらに広げることを考えている。予算上の人件費増の見込みもないので、レジデンス事業をこれ以上拡充することは難しい。そのためレジデンス事業とは別に、アーティストが海外に行きたいときの窓口として、適切な相手先をマッチングできる場所になることを目指している。スタッフが視野を広げ、海外と連携をとれるように動く。ゆくゆくは、レジデンス事業の実施とは関係なく、作品制作したいときの最初の窓口になればよいという展望がある。「創作のための物理的な場でなく、場の情報の提供でもレジデンスたり得るのではないか」と勝治氏は語った。

インタビュー日時：2020年10月15日(木)10:30～11:30  
インタビュー対象：勝治真美(京都芸術センタープログラムディレクター)  
レポート作成・聞き手：朴建雄・稲村太郎(セゾン文化財団)



## AIR事業・運営団体データ

開始年	2014年
事業名	城崎国際アートセンター アーティスト・イン・レジデンス プログラム
対象分野	舞台芸術(演劇、ダンス、パフォーマンス、音楽等)
募集方法	公募
年間滞在人数/組	20組(2019年度実績)
所在地	兵庫県豊岡市城崎町湯島1062
URL	http://kiac.jp

## 1. 設立趣旨

城崎国際アートセンター(以下KIAC)は、関西有数の温泉街である城崎温泉に建てられた旧・城崎大会議館をリニューアルし、豊岡市の「文化芸術と観光を活用した市のまちづくり戦略」の拠点施設として2014年に開館した。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

旧・城崎大会議館は1983年に開館し、企業等の団体旅行客向けの施設として活用されたが、その後は利用率が下がり遊休施設となっていた。豊岡市内でホール運営を委託されていたNPO法人代表が2014年に温泉街の魅力を活かした舞台芸術のレジデンス施設として改装することを提案し、劇作家・演出家の平田オリザ氏の後押しもあって豊岡市での検討が進み、開館と同時にアーティスト・イン・レジデンスが開始された。

## (2) 事業の目的や理念

優れた芸術作品を世界中に送り出すことと、地域交流プログラムを通して地域住民が多様な芸術活動に触れられる環境を創出することを主なミッションとしている。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

事業名は「城崎国際アートセンター アーティスト・イン・レジデンス プログラム」。対象分野は舞台芸術(演劇、ダンス、パフォーマンス、音楽等)であり、募集方法は基本的に公募。他に、主催事業や提携事業も行っている。選考は、選考委員と城崎国際アートセンタースタッフで構成される選考委員会にて書類審査により実施される。選考で重視するのは、事業としての実現可能性、波及力、国際性、地域文化との関わり、将来性、革新性であるが、表現活動やアーティストとしての社会性についても重要な基準と考えている。現在の状況に応じて、舞台芸術の業界にとって必要だと思われる内容であれば、滞在者はアーティストでなくともよく、作品制作以外でも受け入れる。プログラムディレクターの吉田氏は、「美術作家によ

る上演やパフォーマンスなど、ジャンルを超えて舞台芸術の枠組みや前提を揺るがすような表現にも強い関心を持っている」と語った。

滞在期間は最低3日～最大3カ月であり、平均は2週間～3週間程度。また、滞在条件として地域交流プログラムの実施があり、試演会やワークショップ、オープンスタジオ、アーティストトークなどが行われる。レジデンスの成果が作品となり対外的に公開される場合は、広報物にKIACのクレジットとロゴを入れることを条件としている。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

人的サポートとしては、舞台技術スタッフ、コーディネーターらへの相談が可能。滞在アーティストは城崎温泉の外湯を町民価格(1回110円)で利用可能。こうした外湯の利用や食材の買い出し等を通じて、滞在アーティストと城崎の住民の間にはゆるやかな日常的関与が生まれている。それが地域住民と舞台芸術の関わりの裾野を広げることにつながっている。また、レジデンスでの活動記録は簡潔なドキュメントのかたちで年間のプログラム・ブックに掲載される。主催事業の場合、製作費もサポートする。

作品制作以外も許容するKIACならではのレジデンスでの活動として、2020年8月に実施された第1回アジアベイビーシアターミーティングが挙げられる。乳幼児演劇に関わるアーティスト、研究者が集まってネットワーキングを行い、自己紹介やワークショップを通じて小作品を制作した。コロナ禍の影響でアジア圏の参加者はオンラインで参加した。「あかちゃんとおとなと一緒に体験できる」ベイビーシアターは国内ではその活動が広く認知されていないため、自分たちの活動の相対化ができないという課題があり、活動のエンパワーメントのためのネットワーク作りをこのミーティングを通じて行った。アウトリーチとして、制作した小作品を市の子育てセンターで乳幼児とその保護者を対象に上演した。この上演は乳幼児演劇という、まだそれほど認知されていない舞台表現を通じた新しい価値観の紹介でもあり、地域の子育て世代や乳幼児も楽しむことのできる舞台芸術の提供でもあった。



城崎国際アートセンター+豊岡市立美術館-伊藤清永記念館-+日本・モンゴル民族博物館  
共同企画展「ISDRSI 磯人麗水」オープニングセレモニー 豊岡市立美術館 2020年  
Photo: igaki photo studio



城崎国際アートセンター+豊岡市立美術館-伊藤清永記念館-+日本・モンゴル民族博物館  
共同企画展「ISDRSI 磯人麗水」オープニングフォーラム 豊岡市立美術館 2020年  
Photo: igaki photo studio



余越保子『shuffleyamamba』豊岡公演 出石永楽館 2019年 Photo: igaki photo studio



出石永楽館

### (3) 滞在アーティストの成果や効果

2020年3月の主催事業では、同時代に活躍するアーティストをKIACから市の他の文化施設につなげる試みとして、現代美術作家の田村友一郎氏に豊岡市立美術館での展覧会を委嘱した。この展覧会は物語性のある展開を持った一種の上演として構想された。城崎の近くにある閉店した喫茶店も会場とし、Web上でも展覧会の一部を鑑賞することができるようにすることで、現実と架空の上演を同時並行で展開した。予算面等で多くの制約があり、事業が固定化している市立美術館を、舞台芸術と美術というジャンルを往還するこの事業によって揺るがすことを意図しており、こうして普段であればつながらない物事をつなげることで、既存の価値観を固定化させず流動化し曖昧化することを目指している。

典型的な舞台芸術のレジデンスとしては、振付家・映像作家である余越保子氏の『shuffleyamamba』の共同製作が挙げられる。ダンサーが様々な種類の舞踊を習得するプロセスがあり、振付家との長期にわたる共同作業が必要なプロジェクトであったため、結果的に2ヶ年の支援を行い、最後に共同製作で公演を実施した。作品のテーマは女性アーティストの芸の継承であり、100年以上前に建てられた木造の芝居小屋・出石永楽館で上演した。そもそもコンテンポラリーダンスがあまり上演されない地域の伝統的な劇場で、性的な表現も含むこうした作品を上演するというチャレンジングなこの試みもまた、既存の価値観に揺さぶりをかけることを意図して行

われた。地方都市における芸術活動の意味はこの揺さぶりにある。

KIACでの滞在成果について、吉田氏は様々な観点を持つべきだと考えている。試行錯誤における失敗も成果であるが、対外的に説明する際は、数字やわかりやすい言葉も必要とされる。しかし動員数だけでは測れないプロセスの豊かさをアピールするためには、アーティストとは異なる目線で活動を眺める人間の多角的な視点と評価が必要である。そうしないと活動の評価が平面的になってしまい、その本質的な意義を他者に伝えることが困難となる。プロセスをどのように記録し、言葉にしていけるかが、活動のエンパワーメントのために重要であると吉田氏は語った。

## 3. 運営体制

### (1) 事業のスタッフ構成

KIACのスタッフは、総勢11名。総務に関するスタッフは、館長、館長補佐(豊岡市正規職員)、市の職員(事務補助)の3名。劇場テクニカルスタッフは2名。事業担当は3名で、プログラムディレクター、アートコーディネーター、アシスタントコーディネーターからなる。清掃スタッフ1名と夜間の施錠等の管理スタッフ2名。専門性も立場も違うスタッフが多い。

### (2) 施設構成

ホール1つ、制作スタジオ6つを備え、宿泊施設としては洋室4





市原佐都子『パッコスの花女 - ホルスタインの雌』女声合唱ワークショップ KIAC 2019年  
Photo: igaki photo studio



豊岡演劇祭2021：市原佐都子『パッコスの花女 - ホルスタインの雌』KIAC 2020年  
Photo: igaki photo studio



第1回アジア俳優シアターミーティング：公開プログラム「俳優シアターの作品上演と意見交換会」  
豊岡市子育て総合センター 2020年 Photo: igaki photo studio



日本相撲間芸術作曲家協議会(JACSHA)『オペラ双葉山〜竹野の段』相撲体操ワークショップの様子  
豊岡市立竹野小学校 2020年

室、和室3室を擁する。また、共有のキッチン、ダイニングルーム、シャ  
ワールームがある。

#### 4. 現状の課題・今後の展望

##### (1) 現状の課題

KIACのプログラムでは公演を目的としないプロジェクトでも滞在  
が可能であり、滞在中にアーティストが試行錯誤するプロセス自体  
がレジデンスの魅力である。そのプロセスの豊かさをいかに共有す  
るのか、という点に現状の課題がある。プログラムは主に豊岡市の  
財源で成立しているため、このプロセスをひらく相手として第一に  
想定されるのは、舞台芸術には詳しくない地域住民である。しかし  
地域での認知度はまだ低く、関心のない人には「KIAC」よりも「城  
崎大会議館」のほうが通じる場合も多い。レジデンスという施設の  
性質上どのような活動をしているのかわからないという声もある。プ  
ロセスを踏まえてさらなる創作や上演のチャンスを滞在アーティスト  
に提供するために、舞台芸術のプロフェッショナルとのつながりを今  
以上に増やしていくことも望まれる。

また、事業そのものをよりよく持続する方法の模索も課題である。  
KIACはここまで7年間、主に豊岡市の予算で事業を実施している  
が、継続性の担保が未だになされていない。常に風通しをよくしな  
がら事業自体をアップデートするための人的パワー、バランス感覚  
をもつために、事業に余裕をもたせ、何のための活動なのか広い視

点・視野で明確化すること、そのためのスタッフのスキル向上が必  
要とされている。

##### (2) 今後の展望

今後の展望については、「博物館」ではなく「アートセンター」とし  
て常に鮮度のあるアーティストの活動を社会の状況といかに接続  
し対応するのかを考慮した上で、豊岡演劇祭や2021年開設され  
る専門職大学によって流入してくる舞台芸術関係者と新しく連携  
し、人的ネットワークを広げていきたいと考えている。

#### 5. 特記事項

##### (1) アウトリーチプログラムについて

KIACでは主催事業として、年に1~2件ほどの割合でアウトリーチ  
プログラムを行っている。趣旨としては、親が文化・芸術に関心がない  
と子どもはなかなか劇場に行く機会がないため、舞台芸術に触  
れる機会が少ない子どもや高齢者に舞台芸術を届けることを意図  
している。この活動については、滞在アーティストが地域との交流を  
希望する場合と、豊岡市からレジデンスと別に予算を措置し他の施  
設で実施する場合とがある。

後者の例として、OiBokkeShiの菅原直樹氏に依頼し、豊岡市内  
の高齢者施設で「老いと演劇のワークショップ」を実施した事例が  
ある。施設職員や介護に関心がある一般の地域住民が参加し、普





城崎国際アートセンター ホール Photo: 西山円茄



スタジオ1 Photo: 西山円茄



レジデンス(洋室) Photo: 西山円茄



ダイニングルーム Photo: 西山円茄

段関わらない者同士が交流を行った。舞台芸術のノウハウを活用し、豊岡の地域住民が日常生活で疑問や関心を抱いているテーマと結びつけ、舞台芸術を捉えてもらう活動としてアウトリーチを実施している。

介護、障害、教育等の誰もが関心を持てるテーマに基づいたアウトリーチプログラムはこれまで数年間、年に1～2件実施していたが、2020年度は市から予算がつかず実施できなかった。「地域住民には劇場・ホールでもよくわからないのに、『アーティスト・イン・レジデンス』だとよりわからないものになってしまう。積極的に施設から地域に出ていき、KIACのみならず街全体をアートセンターと捉えて事業を展開することができればよいと考えている」と吉田氏は語った。

インタビュー日時：2020年10月7日(水) 10:30～12:00  
 インタビュー対象：吉田雄一郎(城崎国際アートセンタープログラムディレクター)  
 レポート作成・聞き手：朴建雄・稲村太郎(セゾン文化財団)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2004年
事業名	DANCE BOX Resident Program / 国内ダンス留学@神戸 / 下町芸術祭 他
対象分野	ダンス、パフォーマンスなど
募集方法	公募、推薦（基本は公募）
年間滞在人数／組	4人（2019年実績）
年間派遣人数／組	1人（2019年実績）
所在地	兵庫県神戸市長田区久保町6-1-1 アスタくにつか4番館4階
URL	<a href="https://db-dancebox.org/">https://db-dancebox.org/</a>

### 1. 設立趣旨

特定非営利活動法人ダンスボックス（以下、ダンスボックス）は、1996年に大阪・千日前のTORII HALL内にダンスボックス実行委員会として設立され、2002年3月まで毎年、年間約30本のダンスプログラム（公演・ワークショップなど）を企画制作した。その後、2002年8月より、NPO法人として認証され、大阪市との公設置民営の劇場（大阪市の現代芸術アクションプランの理念に基づく）【ArtTheater dB】を浪速区・フェスティバルゲート内に設立した。

2007年7月末にフェスティバルゲートの閉鎖によりArtTheater dBは閉鎖し、2009年4月に神戸市から招聘され、神戸・新長田に劇場【ArtTheater dB 神戸】がオープンした。レジデンス事業のほか、劇場運営事業、公演事業、コーディネート事業、専門家育成事業、ワークショップ事業、地域連携事業、国際交流事業、ソーシャルインクルージョン事業、企業大学連携事業、アーカイブ事業等を実施している。

#### (1) 事業の設立趣旨や経緯

2004年（ArtTheater dB時）からダンスボックスではアーティスト・イン・レジデンスを開始。ディレクターの横堀氏が大学在学時に、インドネシア学科でインドネシア語を専攻していたことから、アジアのアーティストの活動に興味を持ち、2001年のアジアコンテンポラリーダンスフェスティバルから国際交流事業に関わるようになる。そこから本格的にレジデンスの担当となった。ダンスボックスがレジデンスを開始した経緯は、大阪市からの要望だったと記憶しているが記憶が曖昧とのこと。

#### (2) 事業の目的や理念

大阪時代（Art Theater dB時）は、ダンサーや振付家がレジデンスを通じて、お互いの経験やスキル、出会いを交換することに焦点を当てていた。2009年に新長田に移転してからは、観客やアーティストの参加数が1/3に減少してしまった。そんな中で、大阪時代とは違い、「アーティストが常にいる劇場」であることをアピールしようと

考え、国内外のアーティストにレジデンスを通して、街の中に入ってもらったり、周辺の商店に出入りしてもらったりすることで、ローカルとの関係性を重視した、新たなレジデンスの形を作り出してきた。

年度ごとに、事業のテーマも変化している。地域の文脈をリソースとすることもあるが、作品制作と発表という形式が定番となっている。但し、発表の形態は年度によって異なる。レジデンス事業はアーティストの創作支援と地域活性化の両方を混ぜていくことの可能性を探っている。

新長田ならではのプログラムは、横堀氏の志向が強くある。新長田に韓国コミュニティやベトナムコミュニティがあることから、それらとレジデンスをミックスさせることで、地域の中の国際性と海外の国際性を繋げていきたいと語る。

### 2. 事業内容・支援方法

#### (1) 事業概要

ダンスボックスのレジデンス事業で実施されているプログラムは、招聘事業、エクステンション事業（2019年度より実施）の2つ。ダンスボックスがコンテンポラリーダンスにフォーカスしている団体であるため、対象分野はダンス、パフォーマンス分野が中心。日本のアーティストと海外のアーティストを繋げることを重視している。選考はダンスボックスのスタッフによって行われる。選考基準としては、作品制作に集中したいというアーティストよりも、地域・スタッフとのコミュニケーションがきちんと取れ、開かれた姿勢をもったアーティストを選出している。そのため、応募条件に地域対象のワークショップの実施を入れている。

#### ① 招聘プログラム

滞在期間は1週間から8ヶ月。対象者は主にアジア圏のアーティストで、日本と海外のアーティスト招聘の比率は年によって変化するが、国内が多い。年齢層は20代から40代くらい。招聘事業は年度ごとにテーマに合ったアーティストを公募・推薦の両方から募集している。そして、国内ダンス留学@神戸（劇場を拠点にして、徹底し





ArtThater dB 神戸 劇場の内観 写真：岩本順平



エリン・キルマレイ滞在制作 下町芸術祭オープニング・パーティー出演 六間道商店街 r3前 2019年度 写真：岩本順平

てダンスに取り組み、作品制作と発表を行うプログラム)の卒業生のフォローアップの観点から、エクステンジのレジデンスに派遣できるように考慮している。ダンスボックスのレジデンス事業では、必ず成果発表を何らかの形で実施。

## ②エクステンジプログラム

アメリカ・シカゴのリンクスホールと提携し2019年まで開催。現在、ディレクターが変わり、提携がストップしている。リンクスホールとの提携事業として、2019年にエリン・キルマレイ(振付・演出)と3名のダンサーをシカゴより招聘し、3週間弱の滞在制作を実施。「サーチパーティー」という作品のレパトリーのリクリエーションで、国内ダンス留学@神戸の卒業生3名の女性ダンサーも参加した。この作品の一部は、下町芸術祭のオープニングパーティーで上演も行った。

### (2)滞在アーティストの活動や支援

基本的に文化庁のアーティスト・イン・レジデンスに対する補助事業では、アーティストへの謝金を予算計上できないため、日当5,000円を支給できるように工夫している。宿舎は寿荘を利用。滞在制作は劇場が空いている際は使用可能だが、なければ、近隣の公共施設を確保するようにしているとのこと。各アーティストにコーディネーターをできるだけ1名つけるように配慮し、アーティストのプランに合わせて、発表方法も柔軟に対応できるようにしている。踊れるダンサーが滞在した際は高校のダンス部でワークショップを実施することで、「若い人が劇場へ来る可能性を作りたい」と横堀氏は語る。

### (3)滞在アーティストの成果や効果

招聘プログラム参加者のデイビッド・ハギンス(振付家)は母親がフィリピン人、父親がニュージーランド人で、幼少期に父親の仕事の関係で兵庫県にいた経緯から、神戸市内のフィリピンコミュニティに入りながら作品を創作し、母親とライブ映像で繋げ作品発表を行った。「発表にはいろんな人が訪れたが、良い顔をして皆帰って行ったのが印象的だった」と横堀氏は語る。

## 3. 運営体制

### (1)事業のスタッフ構成

事業担当者は、横堀氏。スケジューリング、ブッキング、予算、ビザ申請、報告書作成等の全ての業務を行っている。事業計画は1年半くらい前からスタートする。

若いアーティストやスタッフがアシスタントとして関わられるようにしており、「レジデンス事業は制作業務を学ぶ上で最適なプログラムで、アーティストとの共同作業は、いろいろなことに応用可能。アーティストの大切にしたいことを一緒に大切にしながら、事業を進めていくことを大切にしている」と横堀氏は語る。

### (2)施設構成

劇場(100席)と宿泊施設(寿荘)を完備。

## 4. 現状の課題・今後の展望

### (1)現状の課題

- ・レジデンスの魅力は滞在の過程にあるが、その過程で何が起き、地域に還元され、アーティストの中で循環するのにかに関する蓄積方法。
- ・当事者の満足を、いかにして他者にひらけた形にするのか。
- ・費用対効果が見えにくく、助成金がないと事業が成立しにくい。
- ・ネットワークを維持し、生きたものとして作っていくためには、常に手入れをする人材育成が必要。

「レジデンス施設だけでなく、大学機関などがアーティストと協同して、制作できる機会を創出できたら面白い」と横堀氏は語る。

### (2)今後の展望

レジデンス専門の施設を開設するため、神戸市と旧保育園の再活用について協議しているが、難航している。「アーティスト自身が拠点を持ち、安定した創作場所を確保することがアーティストの活動にとって必要不可欠」と横堀氏は語る。





エリン・キルマレイ『SEARCH PARTY』ArtTheater dB 神戸 2019年度 写真：岩本順平



砂連尾理+寺田みさこ『オンブラ・マイ・フ』出演：伊藤愛、山口浩 Y邸 2019年度 写真：岩本順平

## 5. 特記事項

### (1) 地域への活動のひらき方

横堀氏は「プログラムの一部では、あえてアートであることを消していきたい」と語る。アートというフィルターがあることで、わかりづらくなってしまったりするので、このフィルターを消すことにより注力している。コンテンポラリーダンスは、ハイコンテキストで、見たことのない人には共有しづらいものである。どのようにして、人々の暮らしの中にコンテンポラリーダンスを持ち込んでいくのが重要。例として、砂連尾理氏と寺田みさこ氏の小作品を様々な家の中で踊り、住人にも踊ってもらう企画を実施した際、プロのダンサーから「住人の方にとってダンスの振付が、おたまや鍋を扱うように、向き合っていてよかった」という感想があった。日常とコンテンポラリーダンスを繋ぐ仕掛けが印象的である。横堀氏は、「表現は非日常の扉を開きうるものでもあるし、おたまのように、日ごろの暮らしでも用いることができるものになれるといい」と語る。「レジデンスだけで構えているよりも、地域に開いていくという終わりなき関わりを楽しんでいる」という言葉が印象的だった。

### (2) 地域の他文化コミュニティでの文化継承

新長田のベトナムコミュニティで暮らす2世、3世の子どもたちはベトナム語が喋れなくなりつつある。そうした子どもたちのアイデンティティを考え、海の外のベトナムと、新長田のベトナムコミュニティを繋ぐためのプログラムとして、ベトナムの水上人形劇プロジェクトを実施している。2020年はコロナ禍の影響でオンライン開催だったが、来年度は滞在制作を予定しており、3年目には、新長田のベトナムの人々の物語を水上人形劇で上演予定。横堀氏は「レジデンスが文化の継承に寄与できたら嬉しい」と語る。

そして、現在の社会のヒエラルキーを、一見平和そうに、楽観的に、静かに変えていきたいと最後に語ってくれたことが印象的だった。

インタビュー日時：2020年11月10日(火) 10:40～11:40

インタビュー対象：横堀ふみ(特定非営利活動法人ダンスボックス プログラム・ディレクター・AIR担当)

レポート作成・聞き手：浅井信好(ダンスハウス黄金4422代表・舞踏家・振付家・演出家)

## AIR事業・運営団体データ

開始年	2012年
事業名	高知県立美術館 アーティスト・イン・レジデンス
対象分野	パフォーマンス・アーツ(ダンス、人形劇、音楽、映像等)
募集方法	非公募(指名)
年間滞在人数/組	3人(2019年実績)
所在地	高知県高知市高須353-2
URL	<a href="https://moak.jp/">https://moak.jp/</a>

## 1. 設立趣旨

高知県立美術館は1993年11月に開館。

近代・現代の美術作家や郷土関係作家のコレクション展と、国内外の様々なジャンルの作品を紹介する企画展を多数開催してきた。なかでも世界有数のシャガール・コレクションを有する。

また、高知県ゆかりの著名な写真家・石元泰博のプリント・フィルム・関連資料等を網羅的に所蔵し、2013年6月、石元泰博フォトセンターを開設している。

能舞台を有する併設のホールでは、国内外のパフォーマンス、演劇、コンサート、映画、伝統芸能などを上演し、幅広く芸術文化に親しめるよう、講座、講演会、ワークショップ、アウトリーチなども館内外で随時開催している。2020年度はAΦE「WHIST」、サエボーグ「Cycle of L」、津野山神楽の公演事業、新たにオンラインを活用した事業として海外講師によるアクロバットのワークショップや、リモートでの出前音楽教室を実施している。

## (1) 事業の設立趣旨や経緯

2011年度に、美術館のパフォーマンス・アーツ分野における、新しい創作手法や発信、国際的な創造的なネットワークの構築を目指して、最初の2年を横浜のST スポットをパートナーに、パフォーマンス・アーツ部門でアーティスト・イン・レジデンス事業を開始。レジデンス事業の初年度と二年目に文化庁の「文化芸術の海外発信拠点形成事業」に採択されたことが継続の契機となった。現在は文化庁等の補助金や助成金に頼らず自主財源でも続けており、年度ごとに実施可能な内容で持続している。

## (2) 事業の目的や理念

国内外のアーティストが地域と交流しながら、劇場という枠を超え、高知県から新しいパフォーマンス・アーツの形を提示し、発信することを目的とする。高知という地域に興味を持つアーティストを対象に、地域と長期的な関係性を構築できる機会を提供することで、地域住民の参加を積極的に取り入れたリサーチやクリエイション、発表(公演)を展開している。美術館とホールが併設されている高

知県立美術館であるが、レジデンスプログラムはパフォーマンス・アーツ部門に紐づいている。「学芸部門における教育普及のような役割を、パフォーマンス・アーツにおけるレジデンスが担っていると見えるかもしれない」と担当の松本氏は説明する。

## 2. 事業内容・支援方法

## (1) 事業概要

国内外のアーティストを対象に、非公募・指名制で参加アーティストを決定する。高知の地域に興味を持って取り組んでもらえること、美術館の問題意識と合致する活動を行うアーティストであることを期待しているため、担当職員が候補アーティストをリサーチし、美術館内部で検討して選出する。1年/1組年程度での実施。リサーチにあたってはTPAMや海外の舞台芸術祭の視察などの機会を活用しており、そこでの出会いから招聘した例もある。

滞在日数は10日～60日。発表については相談の上決定するなど、プログラムの自由度は高い。滞後には毎回、報告書を作成し、滞後の成果を広く周知している。

## (2) 滞在アーティストの活動や支援

金銭的な支援としては、基本的にエコノミークラス往復の国際(国内)渡航チケットを提供するが、アーティストが独自に渡航助成を取得し、制作費を補う場合もある。日当も支給があり、成果発表をする場合は制作費を提供する。制作費は助成金取得の有無により規模が異なる。

宿泊については宿泊ができる設備を有していないので、都度アレンジしている。例えば、滞在期間に合わせてホテルやマンション(美術館が契約)を提供したり、高知県の面積の広さを活かして、広範囲でのリサーチの場合は拠点を移しながらリサーチできるように宿泊地をアレンジしたりしている。アーティストによって滞在期間の過ごし方は美術館の創作室やギャラリー、ホールを活用して創作したり、地域に積極的に出ていったりと様々で、それによってサポート体制を整えている。美術館内のホールを長期間占有することは難しいので、必要であれば近隣の小劇場やスタジオを借りるこ





高知県立美術館外観



アーティスト・イン・レジデンス2017&公演  
Papermoon Puppet Theatre 新作人形劇『和紙を透かして』高知県立美術館ホール 2017年  
photo: Nae Fukada



アーティスト・イン・レジデンス2018&公演  
Lundahl & Seitt『シンフォニー うつろいゆく美術館』高知県立美術館 2018年



アーティスト・イン・レジデンス2018&公演  
Lundahl & Seitt『シンフォニー うつろいゆく美術館』高知県立美術館 2018年

ともある。

滞在中は事業担当職員1名が主担当としてアーティストをサポートする。通訳や舞台技術スタッフ等を雇用し手配することもある。ワークショップや小学校へのアウトリーチ、地域のアーティストや専門家と引き合わせるなど、関わり合う時間を積極的につくるようにしており、そこから作品へつながることもある。

### (3) 滞在アーティストの成果や効果

基本的に発表という形での成果は求めないが、アーティストが希望すれば調整も可能。美術館ホールや美術館展示棟内、中庭、外庭、館外施設を活用した成果発表の実績あり。複数年にわたって招聘したり、発展性のあるプロジェクトは数年後に発表を高知で行ったりするなど継続的な関係性の上で成果が地域に還元される事例がある。

2015年に招聘したインドネシアの人形劇団ペーパームーン・パペット・シアターは、2017年二度目の滞在制作にて初年度出会った土佐和紙の文化に着想を得た新作を、地元アーティストらと協働し発表した。2019年に招聘した作曲家の宮内康乃氏は滞在中に、長らく使われず倉庫で保管され、現在は小学校の音楽の授業で活用されているガムランと出会い、滞在終了後の2020年度に、高知県立美術館と小学校との協働で「ガムランの練習曲をつくる」というプロジェクトをこどもたちと実施した。

## 3. 運営体制

### (1) 事業のスタッフ構成

パフォーマンス・アーツ部門全体では企画事業課に5名。事業担当は一名(松本氏)。他のスタッフには、サポートを頼む形で関わってもらっている。基本的にレジデンス事業はパフォーマンス・アーツ部門のプログラムであり、美術館の学芸チームとは直接的な共働は現在のところはないが、高知県に拠点を置く地域のアーティストらとのネットワーク構築や、所縁の作家らの調査資料の提供に協力するなどの協力関係がある。

### (2) 施設構成

能舞台を有する約400席のホール。常設展・企画展を行う展示室のほか、シアタールーム、創作室、講義室、アート情報コーナーなど。レジデンス期間中に常時提供できるリハーサル室はないが、劇場や展示室、講義室、創作室などの空き状況に合わせてスペースを確保している。宿泊については、滞在期間に合わせてマンズリーマンションやホテルを提供。

## 4. 現状の課題・今後の展望

### (1) 現状の課題

アーティスト・イン・レジデンスのプログラムの観客・参加者層が





アーティスト・イン・レジデンス2019(リサーチ特化型)  
「イン・トランジション」(タイ×日本)宮内康乃による”声のワークショップ” 春野東小学校 2019年度



出前音楽教室・アジアの楽器「ガムラン」の練習曲をつくる」(作曲・宮内康乃、ガムラン指導・増田久未)  
Zoomを活用して新曲『カメカメ Kura-Kura』を練習する様子 春野東小学校 2020年度

固定化していることが課題。「潜在的に関心がある層の興味をどのように刺激していくのか。公演プログラムでは先端的な作品を紹介することが多いので、地域の観客に対しては、そこへのギャップを埋めていく階段となるような役割をレジデンスで実現できれば。」と担当の松本氏は話す。

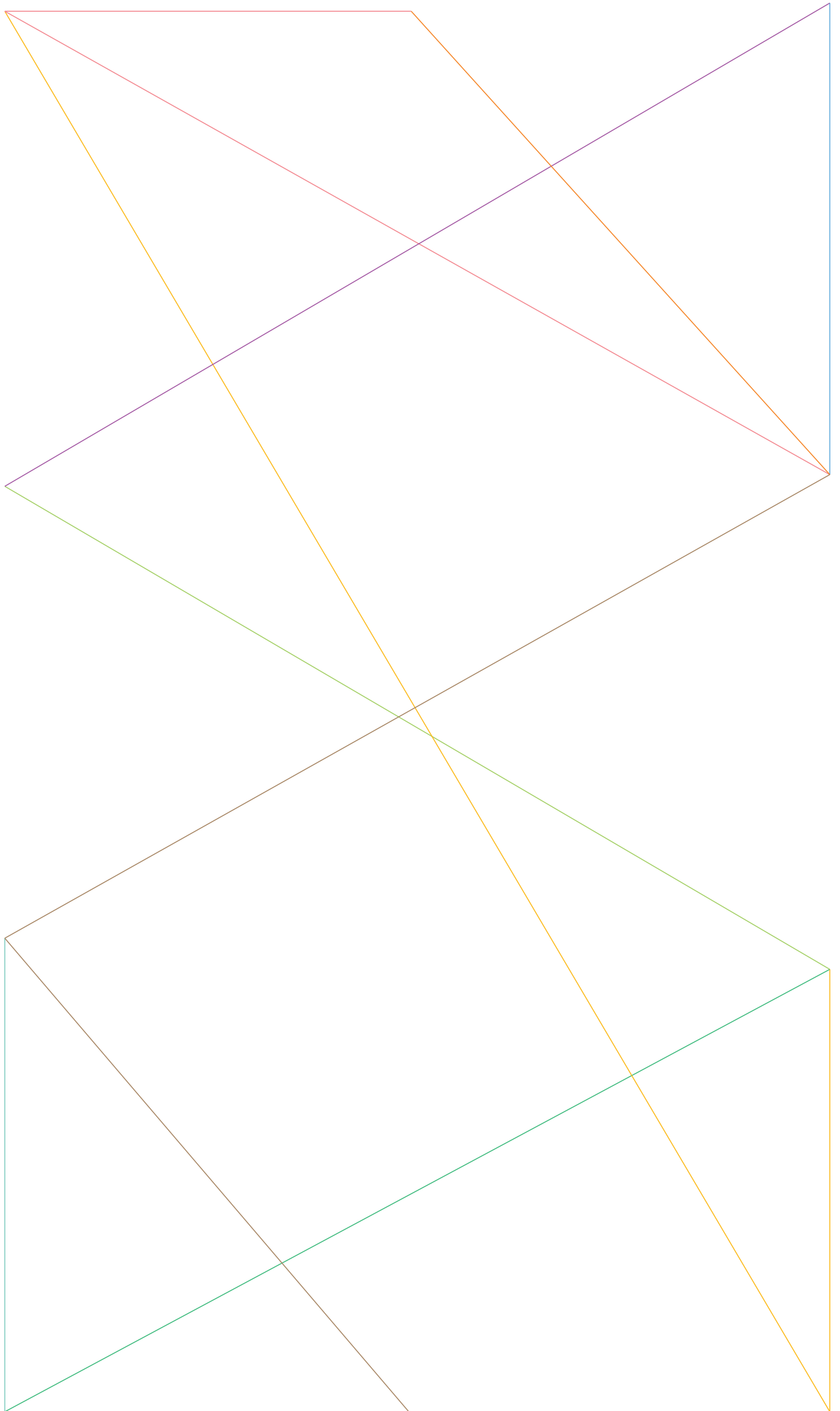
職員は任期なしの常勤雇用なので、長期的な視野でプログラムを企画できる環境である一方、行政的には民間以上に単年度での完結性が求められるがちで、その単年度の事業の息をどれだけ長くするかを問題意識として考えている。

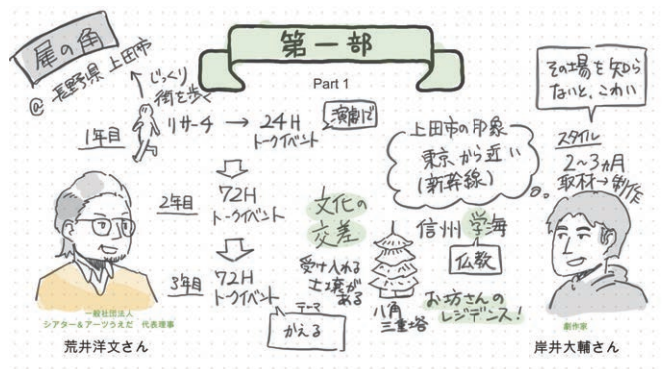
## (2) 今後の展望

常設ホールなどの施設があるが故に自己完結できてしまい、これまで他館との横のつながりを作れていなかった面があるため、他館とのネットワークの構築を今後の展望としている。

インタビュー日時：2020年10月25日(日) 15:00 ~ 17:00  
インタビュー対象：松本千鶴(高知県立美術館 企画事業課 主幹)  
レポート作成・聞き手：勝冶真美(京都芸術センター プログラムディレクター)

# 舞台芸術AIRミーティング2021





## 舞台芸術AiRミーティング2021

舞台芸術AiRミーティング2021では、国内の舞台芸術に関わる主要なアーティスト・イン・レジデンスとその滞在アーティストの活動を事例とし、グローバル化した現代社会におけるローカルな場という切り口からアーティスト・イン・レジデンスの実態と意義、その役割と新しい可能性について議論がなされた。

導入では、モデレーターからアーティストが移動する意味とローカルリティに注目し、アーティスト・イン・レジデンスの意義を考えたいとの問題提起がなされた。これを受け、9名のアーティスト・イン・レジデンス施設関係者及び滞在を経験したアーティストによる発表と意見交換が行われた。以下に議論の内容を採録する。

### 1. 第一部発表：「実験場」としてのAIR

第一部では、犀の角を運営する荒井洋文氏（一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事）と、そのレジデンス事業に参加した滞在アーティストの岸井大輔氏（劇作家）が登場し、犀の角での事例を紹介。続けて、穂の国とよはし芸術劇場PLATでレジデンス事業を担当する塩見直子氏（事業制作部 教育普及リーダー）と滞在アーティストの白神ももこ氏（「モモンガ・コンプレックス」主宰／振付家・演出家・ダンサー）が登場し、穂の国とよはし芸術劇場PLAT（以下、PLATと表記）の事例を紹介。その後、議論が行われた。

### 新たな社会のあり方を小さく試す実験場

岸井氏は2016年から犀の角にて数回アーティスト・イン・レジ

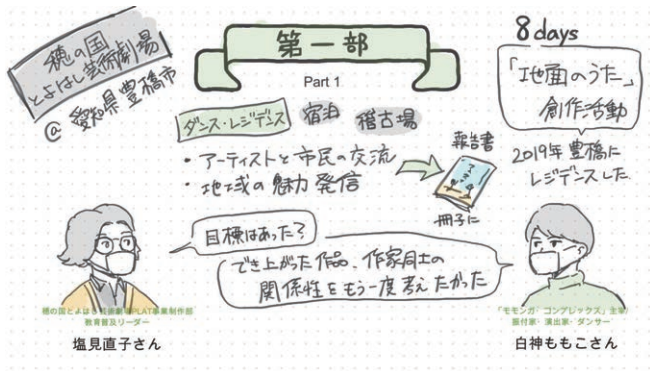
デンスを行い、上田市についてリサーチを行った。2019年には荒木知佳（俳優）、岸井大輔（劇作家）、たくみちゃん（俳優・ダンサー・詩人・オーガナイザー・映像作家・テレフォンオペレーター・ラッパー・予備校講師・アーティスト）、西尾佳織（劇作家・演出家）、真島竜男（アーティスト）と演劇作品『ことなることとこととならぬこと』の滞在制作を行った。

犀の角がある上田市は歴史的に関東、北陸、関西を結ぶ交通の要地であった。中世には中国に留学した僧侶がレジデンスを行っており、信州の学海と呼ばれた。このことから岸井氏は上田が日本のレジデンスの象徴的な場所ではないかと考え、犀の角でリサーチを行った。レジデンス施設のある地域の来歴を知ることが、個別具体の地域住民に見せるものである演劇にとって重要である。

荒井氏は、上述の岸井氏のリサーチに影響を受け、犀の角では自主事業を立ち上げる際に「地域に根差す」ことを意識するようになったと語った。これを受け、岸井氏は、「地域に根差す」とは上田市と言えば真田幸村というようなわかりやすさやポピュラリティーのことでなく、地域住民にとって一番親しみがありなじみがあるがゆえにマヒして意識に上らない地域の特異性のことを指すと語った。こうした特徴は部外者には不気味にも見えるが、レジデンスにおいてはそれに触れる体験が重要である。

岸井氏はレジデンスの意義を、必ず外部からやってくる「ノイズ」としてのアーティストと市民の共存が困難であるという問題に向き合い、世の中の先を考えることができる点にあると語った。新たな社会のあり方を小さく試すための「実験場」として、アーティスト・イン・





レジデンスには可能性がある。

荒井氏はさらに、アーティスト・イン・レジデンスを継続することで、地域と犀の角の双方が思わぬ変化をしつつあると語った。犀の角では市民発の施設活用が始まっている。具体的には生活困窮者やDV被害者のシェルターとしてのゲストハウスの活用など。岸井氏によれば、こうして集まってきた人々に犀の角ならではの何かを見せていくことが重要である。必ずしも演劇でなくともよい。

### 壊す時間と変化を許容する場

白神氏は、PLATの実施するアーティスト・イン・レジデンス事業「ダンス・レジデンス」に参加し、2019年7月8日から15日まで豊橋市に滞在した。主宰する「モモンガ・コンプレックス」ではなく、「かんきつトリオ」として長峰麻貴氏（舞台美術家）、西井夕紀子氏（音楽家）と3人で滞在。目的は既に完成した作品『地面のうた』のブラッシュアップ。

白神氏は「ダンス・レジデンス」での体験について、特徴を2点語った。第一に、新しく作るのではなく、既にあるものを「壊す」時間を持てたのがレジデンスならではのだった。2019年のレジデンスでは既存の作品や団体内の関係性を解体し、細かな計画を立てずに各々が自由に活動。三河太鼓の家元に会いに行ったり、海に散歩に行ったりと気ままに行動した。

白神氏は第二に、変わってしまうことを自由に楽しめる場としてレジデンスが機能していたことを挙げた。三河太鼓が時代に合わせ録音の活用や簡易化を行い変容していることに影響され、白神氏

は豊橋で出会う時間・空間・他者による変化を受け入れることを許容し、楽しむようになった。地域の老人ホームの方々とのワークショップも、その場にいる人々がやることを自由に選択し自ずと生態系のようなものができるかたちで実施した。

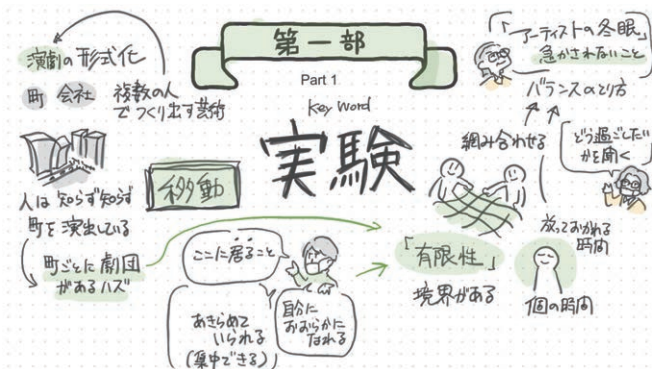
### 地域住民とアーティスト、互いの意識せざる特徴の発見

第一部の議論では、モデレーターより、「なぜ移動して創作するのか」「理想的なアーティスト・イン・レジデンスとは」「地域への運営者の意識」などの問いかけがあり、議論の総括として、地域とアーティストの関わり方について意見が交わされた。

「なぜ移動して創作するのか」との問いかけに対し、岸井氏は次のように応じた。自分は街ごとの人間集団を劇団としてとらえ、そこでの人々の振る舞いを演劇の上演ととらえている。街から街へと移動することで、街ごとの人間の振る舞い方の土台となる何らかの戯曲を書き、そこに介入し新しく何かを作ることができないかと考えていた。白神氏は、東京の過密スケジュールから解放され、東京と違うおおらかな環境でひとつのことに集中できるため、と答えた。

また、「アーティストにとってどのようなアーティスト・イン・レジデンスが理想的か」について、岸井氏は、各地域の近代的な文化と伝統的な文化を編み合わせることに、地域住民と積極的に交流する機会と1人で思索や試行を行える機会の両方を十分に確保することが重要と語り、白神氏は程よく放っておかれる時間がある場所がよいことを強調した。

続けて「アーティスト・イン・レジデンス運営側として気をつけて



いることは何か」との質問。荒井氏は、自分が住んでいる所から離れることや、特に何も多くのことを要求しないことが、創作においては非常に重要なことだと考えていると述べた。塩見氏は、滞在するアーティストが今、何を一番必要として、PLATで実現したいと考えているかの目標を聞き、それにできる限り寄り添うようにしていると話した。

前述の質問に関連して、荒井氏と塩見氏はアーティスト・イン・レジデンス運営者としての地域への意識について次のように語った。荒井氏は、様々な滞在アーティストの視点によって地域に対する認識が変わり、地域住民にこれまでと異なる発想や別の事業が生まれることを重視している。塩見氏は、PLATでは個々のアーティストに応じた地域住民との関わりを創出し、それを報告書等で発信していると述べた。具体的には、滞在アーティストの豊橋での活動内容や、豊橋から持ち帰ったものを日本国内外でどのように発信しているか等について、豊橋市民や普段芸術に関わりの少ない人でも読みやすいように、分かりやすさや伝わりやすさを重視した報告書を毎年発行し、伝えている。

議論の総括として、地域とアーティストの関わり方について登壇者がそれぞれ以下の通り語った。岸井氏によれば、レジデンスにおいてアーティストは住民が気づいていない地域文化の特徴を、地域住民はアーティストが気づいていないアートの特徴を、それぞれ発見する。また、かつて地域がどのように旅人を受け入れてきたか、その対応の違いこそが地域性であり文化である。そこにこそ世界すなわち他者と地域の関わり方が多く隠されている。この意味で地域

を考えることが世界を考えることである。

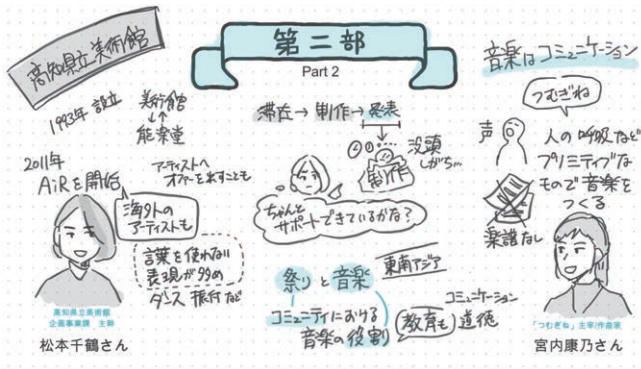
白神氏によれば、犀の角やPLATのよさは、稽古場がガラス張りになっていて、知らないアーティストがなにかしていることを地域住民が意識的でなくとも垣間見られるようになってきていること。また、塩見氏によれば、白神氏が述べたような環境に加え、どのような人が滞在しているかを滞在期間中にもチラシやFacebookなどで宣伝することで、ダンスを見たことがなかったら一般の地域住民が公開イベントに徐々に参加するようになり、アーティストに興味を持つ人が増えてきた。「ダンス」や「アート」だからではなく、やってきた新しい旅人がどういう人なのかを市民は知りたがっている。

荒井氏によれば、上田市で昔からアーティスト・イン・レジデンスのような活動が行われてきたのは、社会が膠着し問題を抱えていたため。社会に問題があるからこそアーティスト・イン・レジデンスが必要とされるのは、犀の角で企画会議をしている一方で、同時にゲストハウスで生活困窮者への支援が行われていることにも象徴的である。

## 2. 第二部発表：「準備の場」としてのAIR

第二部では、高知県立美術館の松本千鶴氏(企画事業課 主幹)と、そのレジデンスプログラム「イン・トランジション」に参加した滞在アーティストの宮内康乃氏(「つむぎね」主宰/作曲家)が登壇し、高知県立美術館での事例を紹介。また、城崎国際アートセンターの吉田雄一郎氏(城崎国際アートセンタープログラムディレクター)と滞在アーティストの山田由梨氏(「贅沢貧乏」主宰/劇作





家・演出家・俳優)及び堀朝美氏(「贅沢貧乏」制作)が登壇し、城崎国際アートセンター(以下、KIACと表記)の事例を紹介。その後、議論が行われた。

### 直接の交流による信頼から発展するプロジェクト

宮内氏は2019年11月、リサーチに特化した10日間に渡るアーティスト・イン・レジデンスプログラム「イン・トランジション」に参加。2018年に国際交流基金アジアフェロシッププログラムによりマレーシア、カンボジア、タイ、インドネシアで実施した祭りと音楽に関する半年間のリサーチを踏まえ、コミュニティ形成という音楽の役割への関心から、土地に根差した音楽や祭りのリサーチ及び地域住民との触れ合いを目指したものであった。具体的には、津野山古式神楽の上演と稽古、いざなぎ流と呼ばれる民間儀礼、土佐の義太夫節等々について鑑賞、体験、聞き取りを行った。また、高知市の姉妹都市であるインドネシア・スラバヤ市から寄贈されたガムランセットについてもリサーチした。

宮内氏はアーティスト・イン・レジデンスでは現地の場所や人に直接触れられることに言及。レジデンスを通じてリサーチ対象に関わる人々に直接会い、話すことで、信頼関係が構築され、対象について具体的に深く話を聞くことができるようになることも語った。

宮内氏は、「イン・トランジション」でのレジデンスからガムランプロジェクトが生まれた経緯についても語った。小学校で授業に使用されていたガムランについて調査し、高知県立美術館と担当教師の提案で子どもたちに声のワークショップを行った。これをきっかけに、

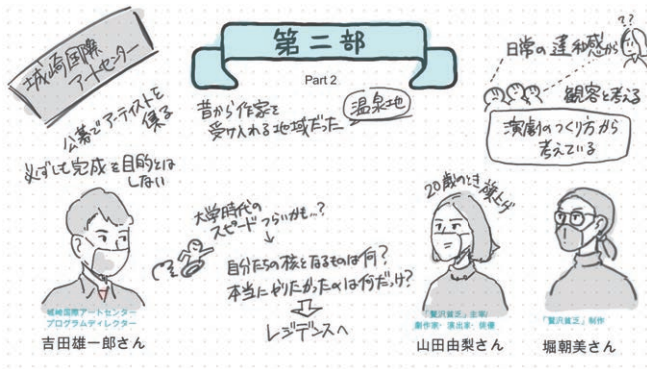
次年度に子どもたちのためにガムラン初心者用の新しい練習曲を宮内氏が作曲するプロジェクトが、文化庁令和2年度戦略的芸術文化創造推進事業「JAPAN LIVE YELL project」の一環として、高知県立美術館の企画で発足。小学校で実施しているウミガメの孵化飼育活動にインスピレーションを得た楽曲『カメカメ Kura-Kura』を小学生と共同制作した。これを起爆剤として新たなコミュニティが生まれ、インドネシアのガムランコミュニティともつながっていくことが期待されている。

宮内氏は「イン・トランジション」で生まれたアーティスト間での交流についても語った。このプログラムには、タイのビジュアルアーティスト、ウィラワン・ウィアントンと、同郷の制作者、ワイラ・アマタタンマチャドも同時期に参加し、仏教や尼僧を中心とする日本とタイの性差を文化的・社会的に比較考察するパフォーマンス・リサーチを行っていた。仏教音楽である聲明も扱う宮内氏とは関心が合致し、リサーチではほぼ共に行動。今後お互いの国で呼び合い、新しい活動をしていきたいと宮内氏は考えている。

### 余白が可能にする振り返りと準備

贅沢貧乏は、KIACでのアーティスト・イン・レジデンスをカンパニーにとっての新しい展開の模索に活用した。1年に2~3本新作を書くというハイペースで活動を行っていたが、これまでの活動を振り返り劇団のスタイル・メソッドを確立する「肉味噌プロジェクト」で2018年に3週間KIACに滞在。2020年にはコロナ禍を受け、劇団ではなく劇団員個々人が滞在内容を決める「個人滞在」を行った。





現代社会では弱者とされてしまう人々や多様な立場の人々の声を汲み取るという劇団の創作スタイルが、作品以上にこの滞在制作に表れた。2回のレジデンスに関し、それぞれの内容とレジデンス自体の特性について、以下のように山田氏は語った。

山田氏によれば、2018年の滞在では、24時間自由な中で贅沢貧乏の創作の核を振り返り、ディベート、ダンス、料理など様々なことを行った。レジデンスでは日常と制作がシームレスになっているため、創作をしていない余白の時間の雑談からアイデアが生まれることもあった。

山田氏は、レジデンスでは公演のチケットを売らなくてはいけなく、スタジオや劇場を有料で借りているため有意義に時間を使わなくてはいけないというプレッシャーから解放されることを指摘。アーティストがレジデンスで経験するのは普段の創作とは異なるもう一つの時間である。これを受けて吉田氏は、アーティスト・イン・レジデンスには、劇場システムとは別のオルタナティブな発表や創作の場所として機能する可能性があると言った。

山田氏は、2020年コロナ禍のアーティスト・イン・レジデンスにおいて、今何が自分たちに起きていて、何を解決すれば今後創作を続けることができるのかに向き合うことができたと言う。これは情報過多の東京では不可能だった。都会から離れ自然に恵まれたKIACで情報を遮断し、考えることによって、創作するために心身の状態を整える準備ができる。

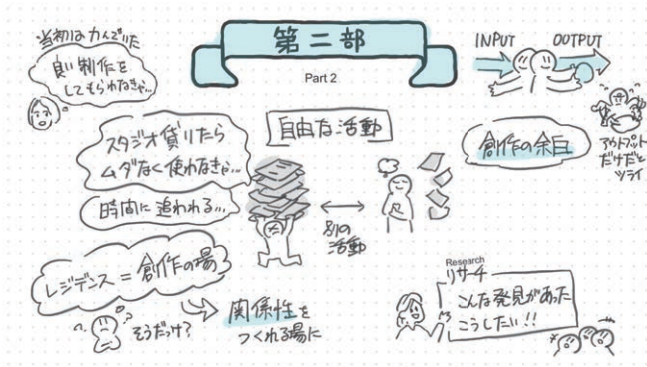
### アイデアが膨らむ自由な余白としてのアーティスト・イン・レジデンス

第二部の議論では、「普段の創作活動で自由に感じないことは多いか」「リサーチに絞ったアーティスト・イン・レジデンスの感想」などの問いかけがなされ、アーティストと地域の相互変化への言及もあった。議論の総括として、アーティスト・イン・レジデンスの意義についても意見が交わされた。

まず、「レジデンスは束縛が少なく自由であるとの意見が多いが、では普段の活動で自由に感じないことは多いか」との問いかけに、宮内氏と山田氏が応じた。共通する見解として、決められた期間内によりアウトプットを出すことに追われる創作の場ではなく、インプットのために自由に関係性を作れる場であることがアーティスト・イン・レジデンスの独自性だという点が挙げられた。山田氏によれば、無理なく負荷なく創作できるレジデンスの環境と、負荷が必要な通常の創作は性質が異なる。

続けて松本氏より、「イン・トランジション」はタスクに縛られない余白のあるリサーチプログラムとして実施したが、参加した宮内氏にとってどういう経験だったかとの質問があった。宮内氏によれば、アーティスト3人でのレジデンスでは、それぞれの興味で活動し、合間の時間に多く話すことができたことが大きな刺激になった。高知の人々に関しても、数年から10年ほどの長期的な視点で関係性を築いていく基盤をレジデンスで得ることができた。これをスタートラインとして様々な創作につなげたいと宮内氏は語った。

「イン・トランジション」について、松本氏によれば、宮内氏のレジ



デンス初期に実施したパブリック向けのトークが地域への接続に非常によく機能した。地域住民にこれまでの活動とリサーチのための仮説を共有し、知りたいことを問いかけたことで、様々な情報を得ることができた。関連して、宮内氏は地域住民とのコミュニケーションについて次のように語った。ローカルコミュニティに対して一方的に興味を全面に出すと敬遠されてしまう。まずは人との出会いとコミュニケーションを第一にして、自然と縁があればつながっていくというスタンスであることが経験上重要である。

ここまでの議論に関連し、アーティストと地域の相互変化にも話が及んだ。吉田氏によれば、国内でも都市部では冷ややかな反応の観客が多いが、豊岡では素直な反応が多いと言うアーティストが多い。ここに見られるように国内であっても異なる文化が存在している。地域住民とアーティストが互いに持つ異なった文化に触れて影響を受けあうことが、アーティスト・イン・レジデンスにおいては重要である。

第二部での議論を総括するにあたり、アーティスト・イン・レジデンスの意義はアーティストが自由に動ける余白の中でアイデアが膨らむ環境を作れることにあるという点で、登壇者の見解は一致した。山田氏が述べるように「未来の奴隷にならない」ことが重要であり、生産性を求めないことで生産性が上がるという逆説がそこにはある。

## 開催概要

### 舞台芸術AIRミーティング

日時：2021年2月13日(土) 13:00 - 18:00

会場：BankART Temporary(ヨコハマ創造都市センター)

第一部登壇者：荒井洋文(一般社団法人シアター&アーツうえだ 代表理事)、岸井大輔(劇作家)、塩見直子(穂の国とよはし芸術劇場PLAT事業制作部 教育普及リーダー)、白神ももこ(「モモンガ・コンプレックス」主宰/振付家・演出家・ダンサー)

第二部登壇者：松本千鶴(高知県立美術館 企画事業課 主幹)、宮内康乃(「つむぎね」主宰/作曲家)、吉田雄一郎(城崎国際アートセンター プログラムディレクター)、山田由梨(「贅沢貧乏」主宰/劇作家・演出家・俳優)、堀朝美(「贅沢貧乏」制作)

モデレーター：稲村太郎(公益財団法人セゾン文化財団 プログラム・オフィサー)、グラフィックレコーディング：片桐祥太

<https://www.tpam.or.jp/program/2021/?program=performing-arts-air-meeting>

主催：公益財団法人セゾン文化財団、

国際舞台芸術ミーティング in 横浜 2021実行委員会



令和2年度年度文化庁

「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた  
国際文化交流促進事業」

# 舞台芸術における アーティスト・イン・レジデンスの 特徴と役割





## 舞台芸術におけるアーティスト・イン・レジデンスの特徴と役割

本研究では、舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンスの意義や役割を考える目的で、調査と研究会を実施した。各事業の理念や目的が多様であると同様に、その意義や役割は一概ではなく、舞台芸術を取り巻く環境や時代とともに変化していくと考えられる。そこで、本章では、調査全体を俯瞰し、その意義や役割を検討するための要点を整理した。

### (1) 事業の設立趣旨や経緯

本調査により、事業を開始した年代や環境に応じて、アーティスト・イン・レジデンスの趣旨は様々であることがわかった。具体的には、主に国際文化交流の潮流の中で始まった事業、劇場やフェスティバルでの滞在制作を背景とする事業、また、文化芸術によるまちづくりや地域活性化を背景とする事業などがある。

本調査中で、最も早く「アーティスト・イン・レジデンス」として事業を開始したのは京都芸術センターで、2000年の開館と共に若手アーティストと市民の交流というミッションに即した国際交流プログラムを開始する。京都芸術センターは海外の先行事例として、ローマのヴィラ・メディチやパリのシテ・アンテルナショナル・デ・ザールを参照している。

その後、2004年に特定非営利活動法人ダンスボックスが当時、拠点を置いていた大阪で国際交流事業としてアーティスト・イン・レジデンスをスタート。当初は振付家同士の経験やスキル等を交換することが目的であったが、2009年に新長田に拠点を移し、地域との関わりを強く持つプログラムに発展している。

一方で、アーティスト・イン・レジデンスという名称が必ずしも使用されていないが、劇場では、それ以前から公演を前提とする滞在制作が行われている。例えば、静岡県舞台芸術センターは劇場の開館から滞在制作を事業の軸としている。その他にも、数多くの公共劇場や小劇場で滞在制作は従来から行われている。

2011年以降、文化庁のアーティスト・イン・レジデンスに対する補助金事業の再開を背景に、舞台芸術でもアーティスト・イン・レジデンスのニーズが高まる。例えば、セゾン文化財団は90年代から森下スタジオを拠点に国際交流事業を推進しているが、2011年にアーティスト・イン・レジデンスを事業化。同年から文化庁の補助金を受けて事業を推進している。また、高知県立美術館も2011年度から国際的なネットワークの構築を目的の一つとして事業をスタートし、文化庁の補助金を受けたことで、その後も事業を継続している。

2014年、舞台芸術のアーティスト・イン・レジデンスを専門とする城崎国際アートセンターが開館。同センターは豊岡市のまちづくり戦略の拠点として地域振興の一翼を担い、年間を通して数多くの国内外のアーティストの創作を支援している。同センターでアーティスト・イン・レジデンスを初めて経験するアーティストも少なくなく、舞台芸術においてアーティスト・イン・レジデンスの普及を広く促している。

また、公演ではなく、創作支援を目的とする公共劇場の事業として、2017年から穂の国とよはし芸術劇場PLATが「ダンス・レジデンス」をスタート。そして、2017年以降、インディペンデントの立場で活動するアーティストやプロデューサーが主導するアーティスト・イン・レジデンスが広がる。アーティストの創作支援、人材育成を目的とするダンスハウス黄金4422、アジアとのネットワークに特化した若葉町ウォーフ「波止場のワークショップ」、フェスティバルの一環としてアーティストと地域との交流を促す犀の角の上田街中演劇祭「アーティスト・イン・レジデンス in 海野町」などである。

### (2) 事業の目的や理念

劇場では、公演を目的とする滞在制作が古くから行われてきた歴史があるが、アーティスト・イン・レジデンスとしては、公演等の発表だけでなく、そのプロセスに焦点を当てた創作支援も大きな目的の一つである。近年では、一つの作品の創作を長期的に取り組むアーティストも増え、そのニーズも高い。

美術や音楽と同じく、舞台芸術においても、アーティストと地域住民の出会いや交流、地域での舞台芸術の鑑賞や参加の機会の提供をミッションとするプログラムは多い。例えば、犀の角では、人口減少を課題とする地域において、地域の創造豊かな人材の創出を目的に、人が集まる場、多様性が生まれる場づくりが行われている。また、特定非営利活動法人ダンスボックスでは、劇場と地域のアーティストや観客をつなぐ役割を滞在アーティストが担い、地域との関係性を深める取り組みが展開されている。

さらに、「地域」という視点から、劇場での公演という枠組みを超えた舞台芸術の新しい形式や観客との新たな関係を模索する試みが行われるなど、舞台芸術の可能性を探求する場としても注目を集めている。

国際文化交流を趣旨とする事業では、その交流を実践する場として、多様な文化や価値の共有、国際的なネットワークの発展、国や世代、芸術分野等の境界を超える場の創出などを目的としている。事業を通じてそれらの目的を果たすことで、アーティストの創作支援や人材育成につながると考えられている。

### (3) 滞在アーティストの活動や支援

滞在アーティストの活動は主にリサーチやクリエイション、発表等が中心であるが、移動・滞在先での日々の生活とは異なる時間や場所、環境の中で、「余白」を見つけ、これまでとは異なる新しいものへの挑戦や実験に手応えを感じているアーティストが少なくない。また、他のメンバーと生活をともにすることで、「自由にアイデアを出し合うことができた」、「意思疎通や信頼関係が向上した」といったエピソードも多く、新しいインプットの機会を創出する場としてアーティスト・イン・レジデンスへの期待が大きいことも伺える。

滞在アーティストは滞在中に地域の歴史や文化、風土等に関する新しい気づきや発見を促すことも少なくないが、地域や地域住民との交流からアートの特徴や可能性を再発見した、創作の新たな着想を得たといったエピソードも多い。また、これからの社会のあり

方や問題を思考する場として、アーティスト・イン・レジデンスの可能性を示唆する意見もあった。

滞在中の活動支援として、主に「滞在中の活動に必要な資金の支援」、「滞在中の活動に必要な環境(稽古場や宿泊施設等)の提供」、「滞在中の活動の相談、交流や発表の支援」が挙げられた。

「滞在中の活動に必要な資金の支援」に関しては、所謂、フルサポートとして、日当や交通費、創作活動費等が支払われるプログラムもあるが、「滞在中の活動に必要な環境の提供」や「滞在中の活動の相談、交流や発表の支援」を重視するアーティストも少なくない。滞在アーティストのエピソードからは、そこに「生活」があることが重要で、創作活動やワークショップ等のプログラムと同じく、その土地の日常と接することや、他のメンバーや滞在者と共に過ごすことが醍醐味と考えられていることが読み取れる。

本調査で対象としている事業では、その多くが稽古場や宿泊施設を運営しているが、滞在者の滞在期間や希望に合わせて稽古場や宿泊施設を手配する事業もある。稽古場の利用については、稽古場でクリエイションに集中するアーティストもいるが、リサーチを中心とするアーティストの中には、全く稽古場を利用しないアーティストもいる。一方で、公演を直前とするアーティストにとっては、照明や音響等のテクニカルなサポートも重要で、アーティストが創作に集中できるように、稽古場を24時間利用可とする事業もある。

「滞在中の活動の相談、交流や発表の支援」では、担当スタッフが公演の制作として滞在アーティストと伴走し、地域のアーティストや地域住民との交流を促し、その地域ならではの創作を支援する事例や地域の自治体や文化施設と連携して活動する事例が見られた。また、担当スタッフが一観客として作品についてコメントやフィードバックすることも重要な要素の一つとして挙げられた。

滞在中の活動の支援に関しては、海外の文化機関やフェスティバルに推薦や紹介するなどの例があり、一度限りではなく、継続的であることが伺える。

また、国際文化交流を推進するプログラムでは、海外からアーティストを受け入れるだけでなく、国内のアーティストを海外へ派遣する双方向のエキスチェンジ・プログラムを実施している団体も少なくない。国内のアーティストが海外での活動の場を広げる機会を提供する重要な役割が見込まれる。

#### (4) 滞在アーティストの成果や効果

滞在アーティストの成果や効果については、滞在中に作品が新作として完成し、国内外で発表されることを成果と考える意見が多い。

また、滞在中の出会いや交流から生まれる成果や効果を重視する事例も少なくない。海外から来日したアーティストと信頼関係を築いた地元のアーティストが、その後に作品創作やツアーに参加したり、レクチャーやワークショップの講師として招へいされるなど、アーティストの国際的な往来の活性化を促す事例も挙げられた。また、滞在アーティストの活動に触発される俳優やダンサーも多く、「俳優活動の姿勢に変化が生まれた」、「地域内外の俳優の交流が活性

化した」といった成果や効果のほか、地域のコンテンポラリーダンスカンパニーが結成されたという事例もある。

さらに、地域でアーティストが活動し、地域住民に新しい価値観や考え方を提示することで、「地域や地域住民の変化が生まれた」、「地域の市民活動が活性化した」といった成果や効果があるという意見が挙げられた。

一方で、上記のような成果や効果を数値化することは容易ではなく、滞在アーティストの活動を捉える多角的な視点と評価が必要である。

#### (5) 運営体制

アーティスト・イン・レジデンスを担当するスタッフの役割は多岐にわたり、滞在中の創作や活動の相談や助言のほか、アーティストや地域との出会いや交流を促したり、アーティスト・トークやワークショップ、成果発表等の運営や制作、広報までも兼務したりする。また、滞在中に関する準備や計画、資金調達、滞在中のフォローアップのほか、海外のアーティストが滞在中の場合には、来日に必要なビザの申請手続きや語学スキルも求められる。一方で、アーティスト・イン・レジデンスの専任スタッフを配置する団体は少なく、他の業務と並行しながら事業を実施している場合が多い。

アーティストと一緒に仕事をする経験が得られるという点から、人材育成の場としての可能性を示唆する意見も挙げられている。制作に関わるスキルや知見、コミュニケーション力の向上が期待されるほか、キュレーターやドラマツルク等、多様な人材の育成や活躍の場としても期待される。

#### (6) 現状の課題

アーティスト・イン・レジデンスの運営の観点から、アーティスト・イン・レジデンス同士のネットワークや連携を課題とする発言が多く、アーティスト・イン・レジデンス同士のネットワークを強化することで、アーティストの創作や活動を複数のアーティスト・イン・レジデンスで支援する仕組みの検討の提案が行われた。

滞在中の活動の支援を課題とする事業では、劇場やフェスティバルのプロデューサーやディレクター、制作者とのネットワークの必要性を強調する意見があった。

アーティスト・イン・レジデンスの意義の一つとして、アーティストの滞在中のプロセスを重要視する意見が多いが、その滞在中のプロセスの豊かさを可視化し、共有することを課題とする事業もあった。

地域や地域住民、アーティスト・コミュニティとの交流を課題とする意見の中で、滞在中のプロセスが地域や他のアーティストに影響力を持ち、いかに滞在アーティストの中で循環するのが、今後、重要になるという発言もあった。

アーティスト・イン・レジデンスは事業への投資コストに対する売上や利益が見込めないため、補助金や助成金がないと実施できないという意見が多くあったが、アーティスト・イン・レジデンスの認知度や理解が低いことも課題の一つで、行政や地域、支援者等のステークホルダーへのより丁寧な説明が求められるという発言もあった。

また、短期的に実感できる結果は少なく、その成果や効果は長期的に現れるため、単年度での評価では捉えられないことが課題で、事業自体を単年度で完結すべきでないという意見があった。特に、作品発表を目的としない事業の場合、その傾向は益々、顕著となっていると推測される。

#### (7) 今後の展望

アーティスト・イン・レジデンスに期待する役割の一つとしてアーティストの人材育成を挙げる意見が多くあった。具体的にはアーティストに創造の場を提供し、成長を後押しするインキュベーションの役割である。また、アーティストの海外での活動をバックアップする窓口としての役割を将来の展望とする意見もあった。そこでは、海外の情報提供だけでなく、海外のアーティスト・イン・レジデンスと国内のアーティストのマッチングがイメージされている。

さらに、舞台芸術だけではなく、美術の展示や音楽のライブなど、他の芸術ジャンルとの垣根を越えた活動や交流の場を目指す考えが示されるなど、次世代のオルタナティブスペースとしての役割が期待されている。

現状の課題の中では、国内外のネットワークを問題点や課題とする声が多くあったが、アーティストの創作を支援するアーティスト・イン・レジデンス間の連携や、創作から上演を橋渡しするアーティスト・イン・レジデンスと劇場の連携、そして、地域の舞台芸術関係者との連携を強化したいなどの具体的な意見が多くあった。上演を前提とした劇場間の共同製作とは異なる創造支援の広がりが期待される。



舞台芸術AIR研究会2020報告書

# 舞台芸術における アーティスト・イン・レジデンスの現在

発行日 2021年3月31日

編集 舞台芸術AIR研究会事務局／稲村太郎、朴建雄

発行 公益財団法人セゾン文化財団  
〒104-0031 東京都中央区京橋3-12-7 京橋山本ビル4階  
TEL: 03-3535-5566 FAX: 03-3535-5565  
<http://www.saison.or.jp/>

デザイン 太田博久／golzopocci

助成



令和2年度年度文化庁

「アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業」



舞台芸術AIR研究会